

河浦町文化財調査報告第2集

かわ　　ち　　うら  
河　内　浦　城　跡Ⅱ

熊本県天草郡河浦町大字河浦字湯立免所在の中世城跡



平成4年 3月31日

熊本県天草郡河浦町教育委員会

## 序 文

この「河浦町文化財調査報告第2集」は河浦町教育委員会が平成元年度に引き続いて平成三年度に発掘調査しました崇園寺裏山の河内浦城跡の調査結果をまとめたものであります。

今回の調査は河内浦跡の主郭部分の解明と中世遺物の発見を目的としました。

その結果、建物の柱穴が百数十箇所見つかリ、中世山城の「望楼址」と思われる遺構の発見は県下でも珍しいものであります。

これらの事に依って、城の全容がおおよそ判ると共に、築城用の「詰めの城」であったろうと推察されます。

さらに、染付碗や皿などの、中国産の遺物も多数見つかリ、今回の調査でも大草と海外の交易が裏付けられる等の成果をあげる事ができました。

本事業に深い理解を示して下さいました田代町長、直接発掘調査及び報告書の作成に就いて、御指導、御協力を賜りました熊本県教育庁文化課、並びに郷土史家の先生をはじめ、関係者の方々に心から感謝し、厚く御礼申しあげます。

今後、河内浦城跡が町の活性化の為に有効に利用されるよう祈念致します。

平成4年3月31日

河浦町教育長

竹 口 英 國

#### 例 言

1. 本書は熊本県天草郡河浦町教育委員会が平成3年度に実施した、発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査を実施した遺跡は、河浦町河浦に所在する河内浦城跡で、調査は平成元年度に続き2年度目である(元年度調査分は河浦町文化財調査報告第1集で報告済みである)。
3. 出土遺物は河浦町教育委員会で保管し、主要遺物については町立天草コレジヨ館で展示公開している。
4. 現地調査は松舟博満氏(日本考古学協会員)がその任にあたり、大田幸博氏(熊本県文化課参事)の協力を得た。
5. 遺物の実測は大田氏が担当したが、陶磁器の測定には大橋康二氏(佐賀県立九州陶磁文化館学芸課長)の協力を得た。  
砥石については松舟氏が実測を行った。
6. 本書の執筆は大田と松舟の両氏が行った。さらに、鶴田倉造・鶴田八洲成の両氏から調査関連の原稿をいただいた。その他、一部を御言が担当した。総括は隈 昭志氏に御願いした。執筆者名は文末に記している。
7. 遺構及び遺物の製図は石工みゆき氏が行った。
8. 発掘調査過程の写真撮影は松舟氏が行った。一方、航空写真撮影は關スカイサーベイ、出土遺物の写真撮影は前田一生氏に委託した。
9. 本書の編集は大田氏と溝口真由美氏が行った。

## 本文目次

第Ⅰ章 調査の概要	1
第1節 調査の組織	1
第2節 調査の進展	1
第3節 調査の工程	2
第4節 河内浦城跡の基本的な構造と第1次調査分の検出遺構	4
第Ⅱ章 検出遺構	7
建築址について	7
櫓列について	12
集石状遺構	14
敷石状遺構	14
土 域	15
第Ⅲ章 出土遺物	16
第Ⅳ章 まとめ	30
〔1〕検出遺構	30
〔2〕出土遺物について	31
〔3〕まとめ	35
〔4〕総括	35
限 昭志	35
〔付論1〕河内浦と天草氏、その後	37
鶴田倉造	37
〔付論2〕天草氏居城河内浦城跡の史的考察	41
鶴田八洲成	41
〔付論3〕民俗例に見る掘立柱建物の実例	56
松舟博満	56

## 挿 図 目 次

第1図 河浦町位置図	3	第7図 SB03実測図	9
第2図 城郭模式図	3	第8図 SB04実測図	10
第3図 城跡全体図	5	第9図 SB05実測図	11
第4図 I郭実測図	6	第10図 東側櫓列実測図	13
第5図 SB01実測図	7	第11図 西側櫓列実測図	13
第6図 SB02実測図	8	第12図 集石状遺構実測図	14

第13図	敷石状遺構実測図	・ ・ ・ ・ ・	14	第17図	遺物実測図(3)	・ ・ ・ ・ ・	22
第14図	土坑実測図	・ ・ ・ ・ ・	15	第18図	遺物実測図(4)	・ ・ ・ ・ ・	25
第15図	遺物実測図(1)	・ ・ ・ ・ ・	17	第19図	遺物実測図(5)	・ ・ ・ ・ ・	28
第16図	遺物実測図(2)	・ ・ ・ ・ ・	19	第20図	遺物実測図(6)	・ ・ ・ ・ ・	29

### 表 目 次

第1表	SB01計測表	・ ・ ・ ・ ・	7	第10表	遺物観察表(3)	・ ・ ・ ・ ・	21
第2表	SB02計測表	・ ・ ・ ・ ・	9	第11表	遺物観察表(4)	・ ・ ・ ・ ・	23
第3表	SB03計測表	・ ・ ・ ・ ・	10	第12表	遺物観察表(5)	・ ・ ・ ・ ・	24
第4表	SB04計測表	・ ・ ・ ・ ・	12	第13表	遺物観察表(6)	・ ・ ・ ・ ・	26
第5表	SB05計測表	・ ・ ・ ・ ・	12	第14表	土師器(皿)形態分類表	・ ・ ・ ・	27
第6表	東側欄列計測表	・ ・ ・ ・ ・	13	第15表	土師器(杯)形態分類表	・ ・ ・ ・	27
第7表	西側欄列計測表	・ ・ ・ ・ ・	13	第16表	遺物観察表(7)	・ ・ ・ ・ ・	30
第8表	遺物観察表(1)	・ ・ ・ ・ ・	18	第17表	土師器(皿・杯)法量表	・ ・ ・ ・	32
第9表	遺物観察表(2)	・ ・ ・ ・ ・	20	第18表	遺物年代別分類表	・ ・ ・ ・ ・	33

### 写 真 図 版

図版1	河内浦城跡遠景(北側より)
図版2	河内浦城跡遠景(東側より)
図版3	遺構全体写真(1)
図版4	遺構全体写真(2)
図版5	遺構全体写真(3)
図版6	I郭-②・南西側帯曲輪・南側帯曲輪
図版7	I郭-①(SB01・SB02・東側欄列・西側欄列・集石状遺構・敷石状遺構)
図版8	I郭-②(SB03・SB04・SB05)
図版9	出土遺物(1)
図版10	出土遺物(2)

## 第I章 調査の概要

### 第1節 調査の組織

調査主体	河浦町教育委員会
調査責任者	竹口英國（河浦町教育長）
調査担当者	松舟博満（熊本県文化課嘱託） 大田幸博（熊本県文化課参事）
調査専門員	隈 昭志（熊本県文化課教育審議員） 鶴田倉造 鶴田八洲成
調査機関	河浦町文化財保護委員会
協力者	手柴清人（天草山崇開寺・責任役員代表）
調査事務局	御峯 求（教育課長） 山本正剛（教育課長補佐）
報告書作成	大田幸博（熊本県文化課参事） 松舟博満（熊本県文化課嘱託） 石工みゆき・溝口真由美（熊本県文化課嘱託）
整理作業員	高田ユリ子・佐田ミヨ子・林 枝三（熊本県文化課人吉調査事務所）
発掘作業員	酒井健一 小山孝志 小山エミ子 坂井スミ子 坂井美笑 小山テルエ 酒井六女 登 重由 岩下ヨシコ

〔御峯〕

### 第2節 調査の進展

(1) 河内浦城跡の第1次調査は平成2年2月10日から16日まで実施したが、南側帯曲輪の一部から掘鉢状に掘り窪められた大きな穴が見つかり、ここから数多くの中世遺物が出土した事は河内浦城跡調査報告書で報告済みである。

出土遺物は、90点近いほぼ完形の糸切り土師器(皿・杯)を中心に、ベトナム産の大皿や中国産の半磁器碗などが含まれており、町民の関心をひく事になった。

そこで平成3年度は、より一層の成果を求めて河内浦城跡の本体部分の発掘調査を試みる事になった。

(2) 発掘調査は県文化課に協力を依頼し、平成元年度に続いて、同課嘱託で日本考古学協会員の、松舟博満氏に調査を御願した。さらに、同課参事の大田幸博氏にも調査の助言を御願する事にした。

(3) 発掘調査は平成3年10月5日(土)より12月2日(月)まで、延27日間を費やした。その後、4日間の遺構埋め戻し作業を行い、12月2日(月)に全てを終了した。

なお、松舟氏の勤務の関係上、同氏が現場を離れる際は、同氏からの指示を受けて御峯が酒井健一氏の協力を得て、現場の運営にあたった。

〔御峯〕

### 第3節 調査の工程

(1) 熊本県に甚大な被害をもたらした台風19号の影響は、天草郡河浦町でも例外ではなかった。調査予定地のI郭-①<sub>a1</sub>の東側斜面にあった寺山の雑木は殆ど倒木の状態にあった。中には樹根が剥き出しとなって横転しているものもあり、台風のものすごさを我々に見せつけていた。さらに倒木とはいかないまでも、完全に根が浮き上がった状態のものも多く、このままでは降雨時に倒木と土砂崩れの恐れがあった。

城跡地としての景観も著しく損われた状態にあるので、崇園寺と相談の上、発掘調査の一環として、危険状態にある立木の伐採作業を行った。その結果、城跡からの眺望が極めて良好のものとなり、町内からも城跡の稜線を見る事が可能となった。

(2) I郭-①では、樹根の掘り起こしに手間取った。平成元年度の調査の際、山の斜面部から多くの近世瓦が採掘されており、さらに、崇園寺の所有する明治初期の地籍図に、一部の箇所が寺域として赤く表記されている所から、中世城跡の上層遺構として近世寺院址の存在が考えられた。しかし、調査の結果、近世瓦に結び付く寺院址は検出できなかった。

I郭-②<sub>a1</sub>の調査でも同様な結果であった。

(3) 調査の結果、河内浦城跡に結び付く遺構としてI郭-①から2棟、I郭-②から3棟の掘立柱建築址を検出した。内、I郭-①の1棟については、構造から望楼址と考えられるものであった。同じくI郭-①から山の尾根線に沿う形で、東西両縁に横列が検出された。

(4) 河内浦城の廃城後の遺構も検出された。I郭-②から検出された17世紀の遺物を伴う土壌がそれである。さらに、I郭-①から見つかった数石状遺構も土壌と同時代の可能性がある。この遺構については近世瓦の出土を見る所から、先に述べた近世寺院関連のものかも知れない。

\*注1・2：第3図を参照

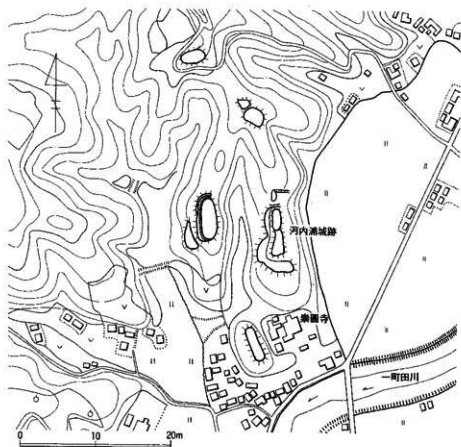
(5) 報告書の作成については、町から依頼を受けて、県文化課人吉調査事務所のスタッフが休日・休日及び土曜日の午後を利用して、12月の初旬から平成4年3月までこれに取り組んだ。

〔松舟・大田〕

#### (6) 発掘調査日誌

第1次調査 (平成3年10月5～18日)		第2次調査 (平成3年11月7～20日・29日～12月2日)	
5日(土)	資材運び。I郭-①の調査を開始する。 表土剥ぎ。樹根の掘り起こしを行う。	7日(木)	I郭-①と並行して、I郭-②の調査を開始する。
6日(日)	表土剥ぎ。寺からの登り道を整備する。	11日(月)	I郭-①の柱穴の掘り込みを行う。
8日(火)	数石状遺構を検出。	13日(水)	I郭-①の土壇から近世陶器が出土する。
9日(水)	立木の伐採作業を開始する。	14日(木)	I郭-②の柱穴の掘り込みを行う。
10日(木)	中世の柱穴が姿を現す。	18日(月)	遺構実測の通り込みに入る。
13日(日)	遺構の実測を開始する。	20日(水)	航空写真撮影。
18日(金)	第一次の調査を終了する。延14日間の調査であった。	29日(金)	遺構の埋め戻し作業を開始する。
		2日(月)	作業を終了する。第2次調査は延17日間の調査であった。

〔松舟〕〔記録協力：酒井健一〕



第2図 城郭模式図



## 第4節 河内浦城跡の基本的な構造と第1次調査分の検出遺構

(河内浦町文化財調査報告第1集「河内浦城跡」よりの要約・抜粋)

[1] 崇園寺の裏山が城跡である。標高200~300mクラスの山が一町田川の河口近くに末端部をのぞかせる所で、狭義的には南北方向に主軸をもち、二股に分かれた帯状形の東側尾根筋にあたる。(第2図参照)

城域としての範囲は、南側の末端部から北側の尾根筋へ約90m進んだ所にある、鞍部箇所を堀切までである。堀切より北側の尾根筋は、全くの自然地形となる。

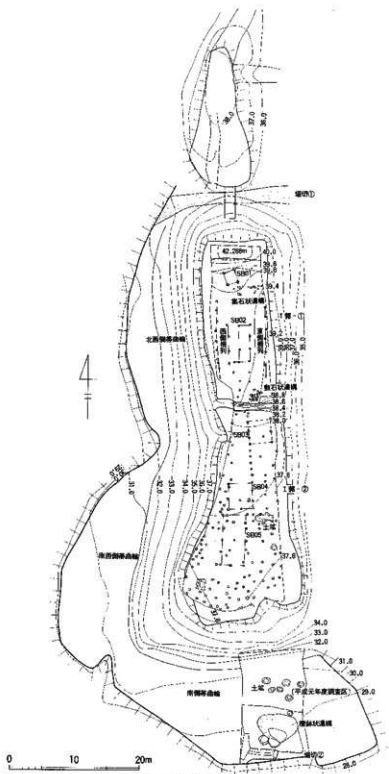
城跡の地形を説明するにあたっては第3図に記入した名称に従う。

名称	地形の概要
I郭-①	帯状形の尾根筋を削平したもの。 長方形の平坦地で南北の長さ25m、東西の幅10.5m。 北東隅に城跡の最高所がある。(標高42.288m)
I郭-②	I郭-①の南側にある段落ちの平坦地で、I郭-①とは1~1.30mの比高差がある。 長靴状の平坦地で南北の長さ33m、東西の幅9.50~18m。
主郭周辺の斜面	東側斜面は急峻な崖面。残り三方の斜面部には顕著な削り落しの痕。
南側帯曲輪	I郭-②とは北縁で7mの比高差。西側の括れ部までの東西の長さは40m。 南北幅は東端で16.5m、中央部で最大14.5m、西端で4m。 北から南への緩傾斜地で、両端では2mの比高差がある。
南西側帯曲輪	I郭-②の南西側斜面を削平した曲輪。I郭-②とは7mの比高差。 南北の長さ35m、東西幅は北端で1.50m、中央部で最大11m、南端で8m。 東から西への緩傾斜地で、両端では2mの比高差がある。
北西側帯曲輪	I郭-①の西側斜面を削平した曲輪。 間に括れ部を挟んで南西側帯曲輪に繋がる。I郭-①とは6.5mの比高差。 南北の長さは38m、北端は北側鞍部の堀切と交わる。東西幅は1.5~5.5m。
堀切① (北側鞍部)	自然地形を利用した堀切。凹状になった尾根筋の鞍部に手を加える程度に止まっている。 堀切の幅は2m弱。堀底の長さ6m。東西両側で急峻に変化している。 堀底との比高差はI郭-①で約1m弱。

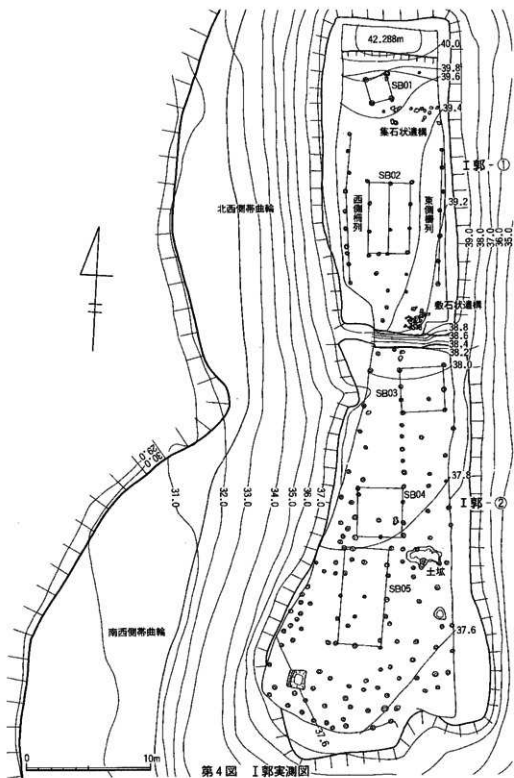
[2] 第1次調査分(平成元年度)の検出遺構

遺構名	地形の概要
堀切②	南側帯曲輪の南側半分から検出されたもので、地山を急峻に掘り窪んでいる。 帯曲輪を北東側から南西側へ弧を描いて斜めに突き抜けるものと思われる。 長さ8m分を検出。箱堀で堀底は2.2~2.3m幅。
掘削状の掘り込み穴	堀切②の北壁をラッパ状に掘り窪めたもの。 幅は東西6.3m、南北5.3m、深さ0.3m。多量の中世遺物出土。
土 塚	南側帯曲輪の北側半分・上段面から検出されたもので、6基を数える。 東西2.6m、南北1.4mの範囲にまとまっている。 江戸時代の墓域と思われる。

[大 田]



第3圖 城跡全体圖



第4図 I郭実測図

## 第II章 検出遺構

調査区からは計175個の柱穴が検出された。内訳はI郭-①から38個、I郭-②から137個である。この中で建築址として復元できるのは5棟分である。

### 建築址について

I郭-①より2棟、I郭-②より3棟が検出されている。いずれも掘立柱建築址で、建築址の番号は北側から南側へ順にSB01～SB05と分り振った。

構造的にはSB02が変則的な総柱スタイルで、他のものは側柱のみの建て方となる。なお、この中でSB01は構造的に見て、望楼址の可能性が高い。

### SB01

I郭-①の北端部から検出された小型の掘立柱建築址である。平面プランは1間×1間で、正方形に近く、桁行2.0m(6.7尺)、梁行妻1.8m(6尺)を測る。

建物の性格は構造からして普通の建物でない事は明らかである。

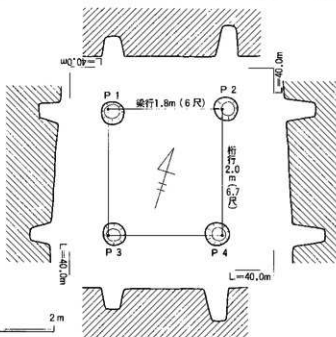
柱穴の深さは32～50cmで、全体的に浅過ぎるきらいがあるものの、櫓組みの望楼址の可能性があると考える。

柱穴自体は、比較すれば東側が深く(46～50cm)、西側でやや浅い(32～34cm)傾向にある。

No	長径	短径	深さ
P 1	37	35	34
P 2	37	36	46
P 3	39	37	50
P 4	37	35	32

(単位: cm)

第1表 SB01計測表



第5図SB01実測図

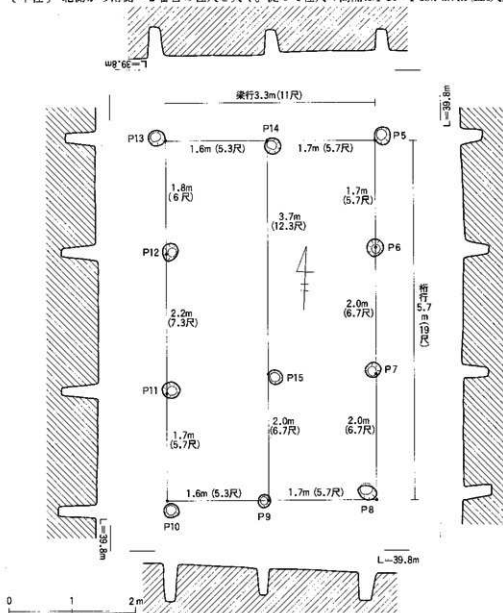
### SB02

柱穴の並びはやや不規則であるが、2間×3間の総柱タイプの掘立柱建築址である。SB01の南隣りから検出されており、桁行5.7m(19尺)、梁行妻3.3m(11尺)を測る。

桁行の主軸方位はN4°Eでほぼ南北方向を示す。

〔側柱〕桁行の柱間は東側でP5～P6が1.7m(5.7尺)、P6～P7とP7～P8が2.0m(6.7尺)、西側はP13～P12が1.8m(6尺)、P12～P11が2.2m(7.3尺)、P11～P10が1.7m(5.7尺)を測る。柱穴の並びは角隅にあたるP5が東側へ、同じくP8とP13は西側へ、それぞれ15cm程ずれている。一方、梁行姿の柱間は北側及び南側とも、東側から西側へ1.7m(5.7尺)、1.6m(5.3尺)を測る。柱穴の並びは南側で、角隅にあたるP10が南側へ15cm程ずれており、柱筋が全く通らない状況にある。

〔中柱〕北側から南側へ2番目の柱穴を欠く。従って柱穴の間隔はP14～P15が3.7m(12.3尺)



第6図 SBO 2実測図

P15～P9が2.0m(6.7尺)となる。P15～P9については東側の桁行(P7～P8)と同じ柱間隔を示す。

総じて、柱穴の深さは32.7～58.7cmで、柱穴自体はしっかりとした造りである。

N <sub>o</sub>	長径	短径	深さ	N <sub>o</sub>	長径	短径	深さ	N <sub>o</sub>	長径	短径	深さ
P5	29	23	32.7	P9	21	19	41.7	P13	26	25	45.2
P6	28	25	33.5	P10	24	22	58.7	P14	25	23	35.5
P7	24	21	40.8	P11	27	26	58.2	P15	23	21	35.0
P8	32	24	43.2	P12	29	23	54.1				

(単位: cm)

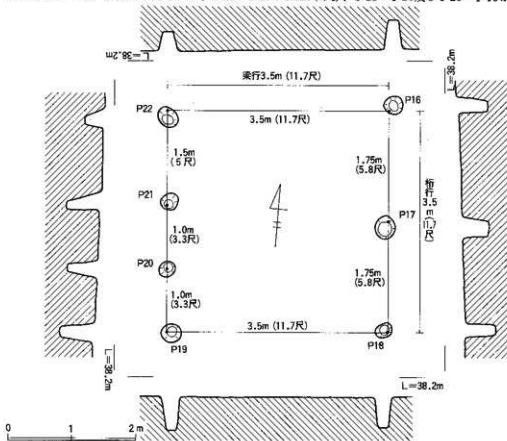
第2表 SB02計測表

### SB03

I郭一②から検出された中柱のない側柱だけの掘立柱建築址である。変則的な1間×3間の造りであるが、平面プランは桁行・梁行妻ともに3.5m(11.7尺)で正方形の形状を呈する。

建物の主軸方位はN7°Eで、ほぼ南北方向を示す。

柱間は東側で柱筋の真中に柱穴があり、P16～P17とP17～P18が1.75m(5.8尺)の均等間隔となる。一方、西側は3間もので、P22～P21が1.5m(5尺)、P21～P20及びP20～P19が、



第7図 SB03実測図

ともに1.0m (3.3尺)を測る。

柱穴の深さは北西側角隅のP22が28cm  
でやや浅い他は、いずれも41~53cmと深く、しっかりとした造りとなっている。

No	長径	短径	深さ	No	長径	短径	深さ
P16	29	26	46	P20	26	24	47
P17	36	31	41	P21	29	25	52
P18	29	22	48	P22	35	29	28
P19	33	29	53				(単位: cm)

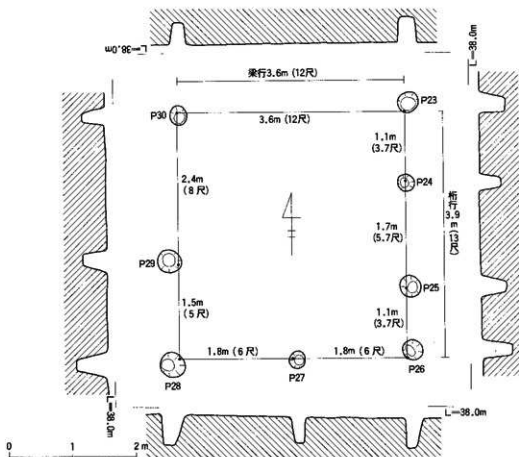
第3表 SBO3計測表

SBO4

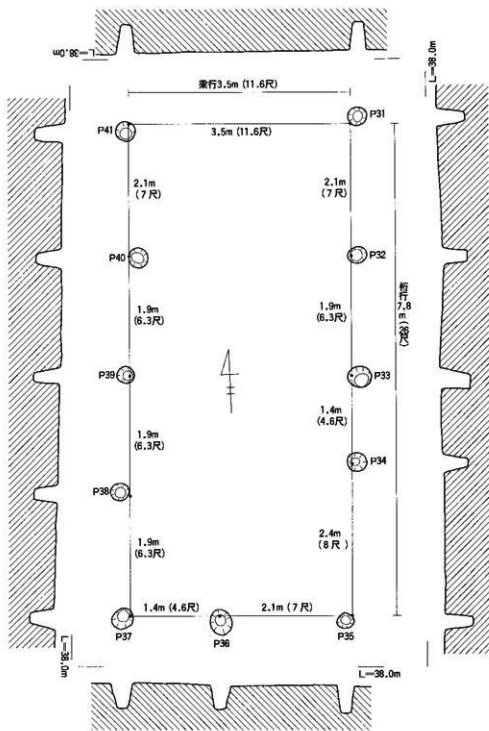
側柱のみの掘立柱建築址である。変則的な2間×3間の造りであるが、平面プランは桁行3.9m (13尺)、梁行妻3.6m (12尺)を測る。

建物の主軸方位はN3°Eで、ほぼ南北方向を示す。

桁行の柱間では東側でP23~P24とP25~P26が1.1m (3.7尺)、P24~P25が1.7m (5.7尺)を測る。西側については2間もので、P30~P29が2.4m (8尺)、P29~P28が1.5m (5尺)となる。一方、梁行妻の柱間は南側でP26~P27及びP27~P28が1.8m (6尺)の等間隔を示す。北側については1間ものである。



第8図 SBO4実測図



第9圖 SB05実測圖



N o	長径	短径	深さ	N o	長径	短径	深さ	N o	長径	短径	深さ
P 23	35	31	40	P 26	33	32	47	P 29	38	36	37
P 24	27	25	33	P 27	29	25	41	P 30	31	27	35
P 25	35	32	39	P 28	42	38	47				

(単位: cm)

第4表 SB04計測表

N o	長径	短径	深さ	N o	長径	短径	深さ	N o	長径	短径	深さ
P 31	31	28	42	P 35	26	23	42	P 39	28	24	41
P 32	29	26	37	P 36	42	33	30	P 40	33	29	40
P 33	36	32	45	P 37	34	33	39	P 41	31	29	44
P 34	30	29	38	P 38	29	27	40				

(単位: cm)

第5表 SB05計測表

## SB05

中柱の無い側柱のみの掘立柱建築址である。変則的な2間×4間の造りであるが、平面プランは桁行7.8m(26尺)、梁行妻3.5m(11.6尺)を測る。

建物の主軸方位はN7°Eで、ほぼ南北方向を示す。

桁行の柱間は東側でP31～P32が2.1m(7尺)、P32～P33が1.9m(6.3尺)、P33～P34が1.4m(4.6尺)、P34～P35が2.4m(8尺)を測る。西側についてはP41～P40とP40～P39がそれぞれ2.1m(7尺)と1.9m(6.3尺)で東側の柱穴と対比するが、P39～P38及びP38～P37はともに1.9m(6.3尺)で、P38の柱穴位置が東側の柱穴から見て大きくずれている。一方、梁行妻の柱間は南側でP37～P36が1.4m(4.6尺)、P36～P35が2.1m(7尺)であるが、北側についてはSB04と同様に1間ものである。

柱穴の深さはP36が30cmとやや浅い他は、37～45cmといずれも深く、しっかりとした造りとなっている。

## 櫓列について

I郭-①の東西両縁に並ぶ柱穴は、その配列と検出場所からして明らかに櫓列の形態を示している。他にもSB03とSB04との間に並ぶ5個の柱穴のようにいくつかの櫓列が考えられるが、今回の復元は下記の2列に留めた。

### 東側櫓列

7個の柱穴から構成されており、長さは10.8m程である。

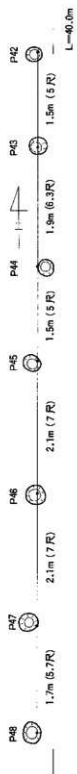
柱穴はP44がやや東側へずれるものの、他は直線的に並ぶ。

柱穴の間隔は、P42～P43とP44～P45が1.5m(5尺)、P43～P44が1.9m(6.3尺)、P45～P46とP46～P47が2.1m(7尺)、P47～P48が1.7m(5.7尺)を測る。

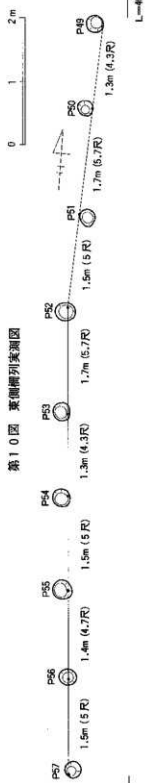
柱穴の並びは西側のものより整然としており、比較して、より櫓列という観がある。

### 西側櫓列

9個の柱穴から構成されている。並びはP52～P57まで直線的であるが、P49からP52まで



第10図 東側欄列測量図



第11図 西側欄列測量図

No	長さ	半径	深さ	No	長さ	半径	深さ
P42	23	22	40	P46	33	30	37
P43	27	26	42	P47	30	28	51
P44	28	24	47	P48	35	28	50
P45	28	23	34				

(単位: cm)

第6表 東側欄列計測表

No	長さ	半径	深さ	No	長さ	半径	深さ
P49	28	25	55	P53	30	25	44
P50	25	24	55	P54	29	27	36
P51	29	23	49	P55	32	30	44
P52	30	27	38	P56	26	24	48
				P57	26	24	46

(単位: cm)

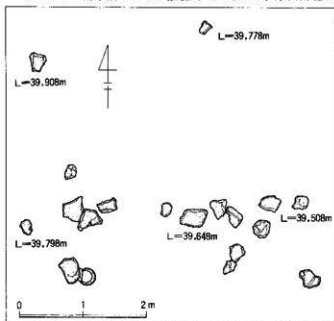
第7表 西側欄列計測表

の並びは東側へ約7°の振れがある。

柱穴の間隔はP49～P50とP53～P54が1.3m(4.3尺)、P50～P51とP52～P53は1.7m(5.7尺)、P51～P52とP54～P55とP56～P57が1.5m(5尺)、P55～P56が1.4m(4.7尺)を測る。

### 集石状遺構

S B 0 1の南東隅からやや散在的ではあるが、東西南北4.6mの範囲から17個の礫が検出さ



第12図 集石状遺構実測図

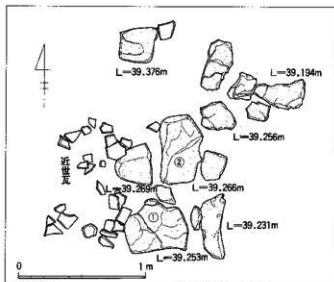
れた。敷石状遺構と同様に、角礫は地山に食い込んでいた。

大きさは最大のもので長軸19cm、最大短軸14cmを測る。中世城からしばしば検出される集石の類であろうか。多くの場合、この集石は中世文書に言う投げ石に比定されている。

### 敷石状遺構

I 郭-①の南側寄りから検出されたもので、敷石状のものは大小13個を数える。大きなのは2つあり、図中に示した①は平面形状で長軸49cm、最大短軸36cmを測る。同じく②は長軸54cm、最大短軸33cmを測る。いずれもしっかりと地山に食い込んでおり、当初、①と②については近世寺院の建物礎石と考えたが、結果として遺構の解明には至らなかった。

この遺構の西側に近世瓦がまとまって出土している。近世瓦は26片である。



第13図 敷石状遺構実測図

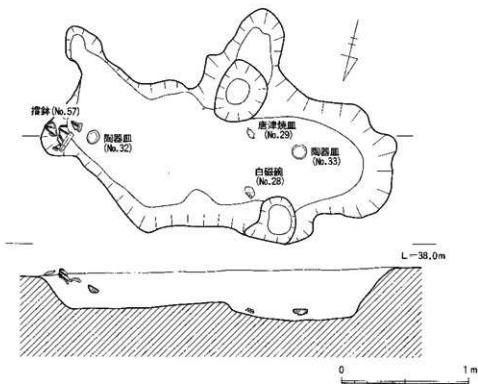
## 土 塚

I 郭一②の東縁、中央部分より検出された土塚で、地山を切り込んでいる。平面形状はやや歪であるが、基本的には長円形状を呈し、長径2.65m、最大短径1.25mを測る。

長径の方軸は東西方向にあり、最大の深さは東側で40cm、西側で28cmを測るが、底部は東側から西側へ1.3mの所で若干の段掘りになっている。

土塚の埋土から17世紀初頭の近世陶器(遺物実測No.32・33)が出土している。2個の完形品で、段掘りを境に東側と西側に1個づつであった。東側のものは段掘りの中央部分で、床面より5cmの所に水平状態にあった。一方、西側のものは段掘りの肩部寄りにあり、床面からの高さは13cmで、斜めの状態に落ちこんでいた。その他、白磁皿(No.28)、唐津焼皿(No.29)、播鉢(No.57)も出土した。

河内浦城の廃城に掘られた遺構とも考えられるが、近世墓塚の可能性も残る。土塚は南北両縁を2つの柱穴で切られている。



第14図 土塚実測図

[ 松舟・大田 ]

### 第三章 出土遺物

1～13は磁器の染付碗及び皿である。時期的には16世紀のもの(3・11・13)、16世紀後半のもの(1・4・6・8・12)、16世紀後半から17世紀初頭のもの(7・9・10)、16世紀末から17世紀初頭のもの(5)、17世紀のもの(2)とに細分される。これらの中で4・9の皿は中国からの輸入磁器であり、9については景徳鎮産と考えられる。器面の文様の中で特筆すべきものは9で、内器面の立ち上がり部分に型打ちによる陽刻文様がある。

14～19は染付の莨菪皿である。時期的には16世紀中葉から末頃のものであるが、14のみやや時代が下がり、16世紀後半頃に限定される。外器面の文様も14だけが2条の界線間に上下2列に並ぶための点描き文様があり、他と異なっている。他のものは細かい点描き文様(15・16・17)や波状文様(17・18)が描かれている。

20～24は青磁碗である。この中で時代の判るものは3点ある。21は15世紀後半から16世紀、22は15世紀末から16世紀前半、24は14世紀後半から15世紀初頭に位置付けられる。文様については、21が粗製の青磁で釉下にかすかな雷文帯が認められる。24にはヘラ描きによるための退化した蓮弁文様がある。25～28は白磁の皿と碗で、時期的にはいずれも16世紀代のものである。この中で25は中国からの輸入品である。

29・30は唐津焼皿で、時期的には29が16世紀、30は16世紀末から17世紀初頭のものである。29は内外器面にクリーム色のワラ釉がかかる。唐津の山瀬の土で焼かれていると思われる。30の釉色は灰茶褐色で内底面に目積みの痕が残る。

31～33は陶器皿で、時期的にはいずれも17世紀初頭のものである。この内、32と33は完形品で、同一土壌から出土した。31は熊本の際で焼かれたものであろう。31と32には緑灰色の灰釉がかかる。33は灰緑色の長石釉がかかっており、体部は中途から屈曲し、その後は内傾気味に直立の状態となる。高台内の外底面には硃殻が付着している。

34は天草産の近代磁器蓋で、時期的には18世紀後半から19世紀中期に位置付けられる。器形は広東型で、内器面に足付きハマが残る。

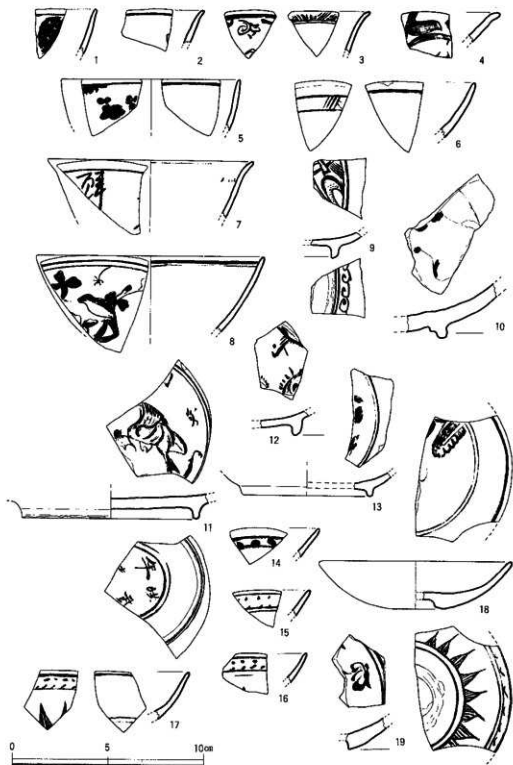
35は瀬戸・美濃産の陶器皿である。16世紀のもので、釉色は黄緑色、外底面に輪ドチが残る。

36～55は外底面が糸切りの土師器である。36～46が皿、47～55が杯に分類される。一次調査では90点近く出土したが、今回は19点のみに留まった。この項の文末に一次調査分の土師器形態分類表(第14・15表)を掲げて、二次調査分の説明を行う。

56・57は唐津焼の播鉢で、時期的には15世紀末から16世紀に位置付けられる。内器面における条線の一単位は、56が6本、57が9本を数える。57の内底面には器面・杯に条線が掻かれている。58が備前の甕で、15世紀から16世紀のものである。

59～61は砥石である。59は残存部分で三面使用が認められる。60は正面だけの使用である。61は河原石(門礫)を使用したものである。片面の使用で粗研ぎに利用されたものであろう。

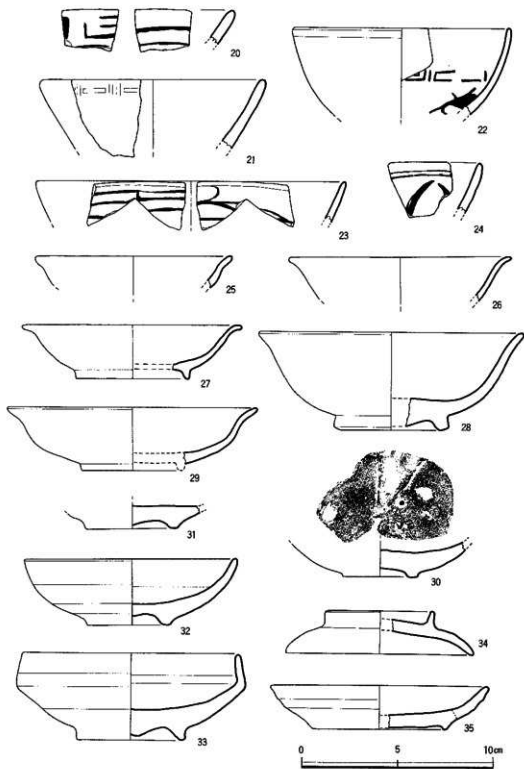
〔大田〕



第 15 图 遗物实测图(1)

No.	器種	形態の特徴	文様・手法・調査	備考
1	染付碗 16C 後	体部は僅かに内湾する。 外器面は上位で、やや窪む。 体部厚：下位 3mm・上位 2mm	内器面：上位に界線。 (極めて青色の呉須) 外器面：花卉文様。 (くすんだ青黒色の呉須)	内器面に不純物の 付着が多い。 出土地点：I 郭②
2	染付碗 17C	体部は直線的に伸びて、口縁部 で、やや外湾する。 体部厚：下位 3mm・上位 2mm	内器面：2条の界線。 外器面：1条の界線。 呉須はいずれも薄い青黒色。	出土地点：I 郭②
3	染付碗 16C	体部は均一の厚さ(2mm)で、直 線的に伸びて、上位で大きく外湾 する。	内器面：3条の界線と斜めの直 線文様。 外器面：2条の界線と文様。 呉須はいずれも青黒色。	出土地点：I 郭②
4	染付皿 (中興産) 16C 後	体部は直線的に伸びて、上位で 外湾する。 体部厚：下位 4mm・上位 3mm	内器面：立ち上がり部分に1条 の界線(1.5mm幅)。 外器面：肉太の文様。 呉須は薄い黒灰色。	内器面は灰白褐色 を呈する。 貫入が走る。 出土地点：I 郭③
5	染付碗 16C 末 ～17C 初	体部はやや内湾する。 復元口径：9.4cm 体部厚：下位～中位 2.5mm 上位 2mm	内器面：1条の界線(太目)。 外器面：1条の界線、小葉文様。 呉須は青黒色。	粗製細器。 釉色は発色不良。 出土地点：I 郭③
6	染付碗 16C 後	体部はやや内湾する。 体部厚：下位 4mm・中位 3mm 上位 2mm	内器面：1条の界線。 外器面：2条の界線間に斜線文 様。 呉須は薄い青色。	器面はくすんだ感 じ。 胎土は白褐色。 出土地点：I 郭②
7	染付碗 16C 後 ～17C 初	体部は直線的に伸びて、上位で 外湾する。 復元口径：10.9cm 体部厚：下位 2mm 上位～中位 3mm	内器面：1条の界線。上位(体 部の外湾箇所)に薄い界 線。 外器面：1条の界線。文字が描 かれている。 呉須は青黒色。	出土地点：I 郭②
8	染付碗 16C 後	体部は僅かに内湾する。 復元口径：12.1cm 体部厚：下位 3mm・上位 2.5mm	内器面：1条の界線(3mm幅)。 外器面：2条の界線。本枝にと まる鳥羽が描かれている。 呉須はくすっきりとした青黒色。	出土地点：I 郭②
9	染付皿 (徳興産) 16C 末 ～17C 初	底器厚：3mm 高台厚：4mm 体部厚：4mm	内器面：立ち上がりに磨打ちに よる掃刷文様。 外器面：立ち上がりに曲線文様。 高台外縁：2条の界線。	出土地点：I 郭②
10	染付碗 16C 後 ～17C 初	底器厚：8mm 高台厚：6mm 体部厚：7mm 張り高台の内側は2段になって いる。	内器面：文様。立ち上がりに1 条の界線(極く薄い青白 色の呉須)。 外器面：並列する斜めの短直線 文様。	高台の外縁から、 内側にかけて無縁。 無縁部分は白褐色。 出土地点：I 郭①
11	染付碗 16C	底器は均一の厚さで平底。 復元直径：9.3cm 高台高：5～6mm 底器厚：6mm 高台厚：3mm	内底面：文様。裏下人物(坐像) が描かれている。 外底面：文字が描かれている。	精良な胎土(上質 な染付碗)。 出土地点：I 郭①
12	染付碗 16C 後	底器厚：4mm 高台厚：3～5mm 体部厚：3.5mm 高台の外側は曲線状を呈する。	内底面：文様。 呉須はくすんだ感じの青黒色。	高台の外縁から内 側にかけて無縁。 無縁部分は白褐色 で、器面は滑らか。 出土地点：I 郭①
13	染付碗 16C	復元直径：6.8cm 底器厚：3.5～5mm 高台厚：3mm 体部厚：3mm	内底面：2条の界線。文様。 内外器面：太目の貫入が走る。	粗製細器。 出土地点：I 郭①
14	蕃如鉢 16C 後	体部は内器面で直線的に伸び、 外器面で三日月状を呈する。 体部厚：下位 3mm・上位 2mm	内器面：1条の界線。 (薄い青黒色の呉須) 外器面：界線間に太めの点線文 様(薄い青黒色の呉須)。	器面は、ややくす んだ感じの白色釉を 呈する。 出土地点：I 郭①
15	蕃如皿 16C 中 ～末	体部は直線的に伸びる。 体部厚：下位 3mm・上位 2mm	内器面：1条の界線。 外器面：2条の界線間に上下2 列に並ぶ細目の点線文様。 呉須はいずれも黒青色。	器面はくすんだ感 じの灰白色釉を呈 する。 出土地点：I 郭②
16	蕃如皿 16C 中 ～末	体部は僅かに内湾する。 口縁は蓋口気味となる。 体部厚：下位 3mm・上位 1.5mm	15と同・何体か?	出土地点：I 郭②

第8表 遺物観察表(1)



第16图 遗物实测图(2)

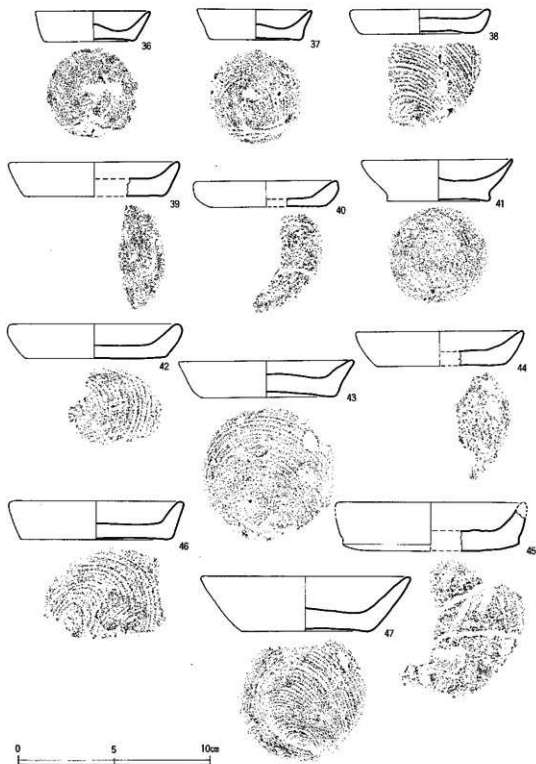


No.	器種	形質の特徴	文様・手法・調査	備考
17	青銅皿 16C中 ～末	体部は内湾する。 体部厚：下位 4mm・中位 3mm 上位 2mm	内器面：上位に1条、下位に2条の界線。 外器面：上位2条の界線間に斜めの直線文様。 下位は波状文様。 口縁は白灰青色。	器面はくすんだ感じ。 胎土は白褐色。 出土地点：I 郭①
18	青銅皿	体部は内湾気味に大きく開く。 復元口径：10.2cm 器高：2.5cm 復元底径：3.0cm 底部厚：4mm 体部厚：下位 8mm・中位 5mm 上位 3mm	内器面：文様。 上位に1条の界線(1.5～2mm幅)。 立ち上がりに2条の斜め界線(一部3条になる)。 外器面：上位に3条の界線。上2条の界線間に斜めの点線文様。中位に波状文様。下位に2条の界線。	外底端は8～7mm幅で無輪。 底部内は縁取りが内来している(一部で無輪の箇所あり)。
19	青銅皿 16C中 ～末	体部厚：下位 8mm・中位 5mm	内器面：文様。2条の界線。 外底端：2条の界線。 外環は白灰青色。	外底端の外縁は6～7mm幅で無輪。 外底の内側も無輪。 出土地点：I 郭①
20	青銅碗	体部は均一の厚さ(5mm幅)で曲線的に伸びる。 口縁部は丸味を帯びる。	内外器面：縁下に横位の直線。	釉色：緑灰色。 口縁部は縁が剥落している(使用痕?)。 内外器面に太目の貫入がある。 出土地点：I 郭②
21	青銅碗 15C後 ～16C	体部は僅かに内湾する。 口縁部は丸味を帯びる。 復元口径：11.9cm 体部厚：下位 6.5mm 中位～上位 5mm	外器面：縁下にかすかな横文様文様(割子によるスタンブ打ち)が認められる。	釉色：黄褐色。 胎土：褐色。 粗製の青磁である。 出土地点：I 郭①
22	青銅碗 15C末 ～16C前	体部は内湾する。 復元口径：11.5cm	内器面：中位に雷文様文様。(型打ちによる文様)。 下位に文様。 外器面：口縁部の直下は5mm幅で狭くナゲられている。	釉色：緑灰色。 高文部部分は濃緑灰色。 胎土：灰白色。 内外器面に太目の貫入がある。 出土地点：I 郭②
23	青銅碗	体部は直線的に伸びる。 復元口径：16.4cm 体部厚：下位 4mm・上位 3mm	内器面：横位の曲線文様。 外器面：横位の直線文様(1～1.5mm幅)。	釉色：緑灰色。 器面に光沢あり。 胎土：良好。 出土地点：I 郭①
24	青銅碗 14C後 ～15C初	体部は僅かに内湾する。 外器面は半月状を呈する。 体部厚：下位 4.5mm・上位 4mm	外器面：太めの退化した連弁文様(へら掻き)。	出土地点：I 郭①
25	白磁鉢 (中国産) 16C	体部は上位で外湾する。 復元口径：10.4cm。 体部厚：下位 4mm(外器面で丸味を帯びる)。 中位～上位 3mm	—————	出土地点：I 郭①
26	白磁皿 16C	体部は均一の厚さ(3mm幅)で伸び、上位で外湾する。 復元口径：11.8cm	—————	出土地点：I 郭①
27	白磁碗 16C	体部は内湾気味に大きく開く。 口縁部で外湾する。 復元口径：11.5cm 器高 9cm 復元底径：6cm 高台高：6mm	—————	内器面に灰色の極小底点が付く。 出土地点：I 郭②
28	白磁碗 16C	体部は内湾し、上位でやや外湾する。 底部の中央は大きく肥厚する。 復元口径：14.0cm 器高：5.1cm 復元底径：6.0cm 高台高：中央部 2mm・端部 3mm 体部厚：下位 8mm・上位 3mm 底部厚：中央部 1.5cm・端部 1cm 高台幅：9mm	高台の端部はへら削り。	釉色：灰白色。 器面の肥厚に(高台内部を含む)施釉されている。 胎土白磁。 出土地点：I 郭② (土塚)

第9表 遺物観察表(2)

No.	器 種	形 態 の 特 徴	文 様 ・ 手 法 ・ 調 整	備 考
29	唐津焼皿 16C	体形は内縁しながら大きく開き、口縁部で外開する。 復元口径：13.1cm 体部厚：下位 6mm・中位 3.5mm 上位 3mm	-----  出土地点：I 第②(土城)	内外縁部にワラ灰釉がかかると、釉の剥離が激しい。ワラ釉は割れしやすい。但し、体部の下位は1.7cm幅で無釉。 器面は乳白色。 釉色：クリーム色 唐津・山瀬の土で焼かれている。
30	唐津焼皿 16C末 ～17C初	底径：4.0cm 底器厚：1.0cm 高台高：中央部 5mm 端部で垂付きに至る。 垂付き：5.5mm幅で扁平。 体部厚：下位 1.2cm・中位 5mm	-----	釉色：灰茶褐色。 外部部から高台内部にかけて全面無釉。 内底面に貝殻みの面が残る。 出土地点：I 第②
31	陶器皿 17C初	底径：4.8cm 高台高：中央部2mm 端部寄り4mm 端部で垂付きに至る。 底器厚：中央部 1cm 端部 1.1cm 端部寄り 7.5mm 垂付き：4mm幅で扁平。 体部厚：下位 1.1cm・中位 4mm	内底面：剥離が痕が残る。	釉色：緑灰色 高台の垂付きから内縁部分に限り無釉。 煎茶碗の陶器と思われる。 出土地点：I 第②
32	陶器皿 17C初	定形品。 体形は内縁気味に大きく開く。 口径：11.2cm 底径：4.3cm 器高：3.5cm 高台高：中央部 4.5mm 端部寄り 6mm 端部で垂付きに至る。 垂付き：4.5mm幅で扁平。 底器厚：中央部 7mm・端部 7mm 端部寄り 6mm 体部厚：下位 1cm・中位 6mm 上位 3.5mm	内底面：1本の薄い稜線。 外底面：3本の薄い稜線。	釉色：緑灰色。 (灰釉) 高台の垂付きから外底面にかけて無釉。 高台内の外底面に剥離が付着する。 出土地点：I 第②(土城)
33	陶器皿 17C初	定形品。体形は平造から明曲し、その後は内縁気味に直立の形状となる。底部は体部と比べて、大きく肥厚する。 口径：11.5cm 口径：12.1cm 器高：4.6cm 高台高：中央部 1～3mm 端部寄り 7mm 端部で垂付きに至る。 垂付き：5mm幅で扁平。 底器厚：中央部 1.3～1.4cm 端部寄り 1cm 体部厚：下位 1.2cm・中位 5.5mm 上位 4.5mm・上位 3.5mm	内底面：2本の薄い稜線。 外底面：3本の薄い稜線。 高台：調整が悪い。	釉色：灰緑色。 (灰釉) 外部部下位の部に分厚く釉がかかっている。一方で部分に無釉の箇所(器面は薄茶色)がある。 高台の垂付きは完全に無釉。 高台内の外底面に剥離が付着する。 出土地点：I 第②(土城)
34	磁器鉢 18C後 ～19C中	復元口径：9.8cm 器高：3.2cm つまみ痕跡：復元直径 6cm 広東型陶	内底面：下位に2条、上位に1本の稜線。 外縁は薄い青黒色。	内底面に足付きハマが残る。 内外底面の一部に大きな貝入が施る。 天草産の磁器と思われる。 出土地点：I 第①
35	陶器皿 (瀬戸式遺) 16C	体形はやや内縁気味に外縁へ大きく開く。 復元口径：11.4cm 器高：2.3cm 復元口径：7.0cm 高台高：中央部寄り 1mm(極めて低い) 端部 2mm 体部厚：下位 8mm・中位 6mm 上位 3mm 底器厚：中央部 7mm 端部 8mm	外底面：2本の稜線。	釉色：黄緑色。 高台の垂付きから外底面にかけて無釉。 胎土：白灰色。 外底面は輪ノリが残る。 2個体を器面上で接合したもので。 出土地点：I 第②

第10表 遺物観察表(3)



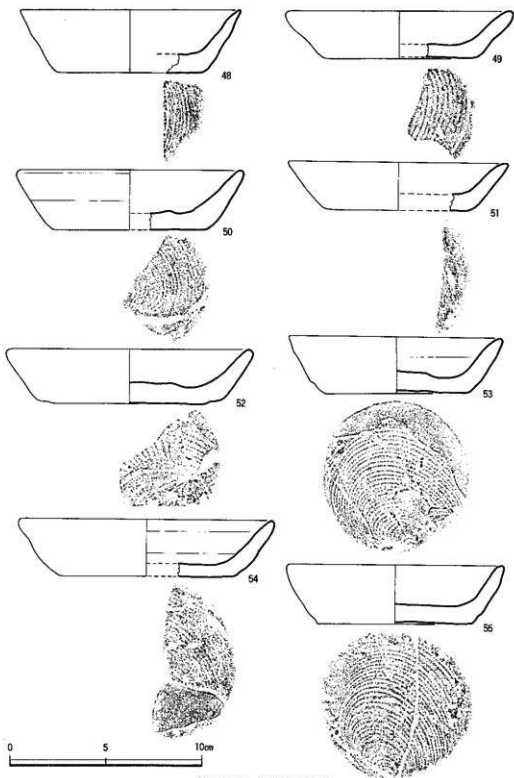
第17図 遺物実測図(3)

No.	法 量 (cm)			底径と口 径の比較	体部の立ち 上がり角度	形 状 の 特 徴	手 法 ・ 調 整	備 考
	口径	底径	高さ					
36	6.0	4.8	1.8	0.80	65°	皿。 体部は直線的に伸びる。 口縁直口。 底部は中央部で大きく肥厚する。上げ気味の平底。 体部厚：外底端 7mm 上 位 2mm 底部厚：中央部 8mm 端部寄り 4mm	内表面：横ナデ。 内底面：横ナデ。 調整き直し。 外表面：ナデ。 外底面：糸切り磨し後、ナデ直し。	色調：鈍い棕色。 一部、灰黒化している。 胎土：粘土。 出土地点：I 第①
37	6.0	4.9	1.6	0.82	72°	皿。 外縁は立ち上がり箇所やや窪むが、その後は直線的に伸びる。口縁直口。 底部は中央部で大きく肥厚する。 体部厚：外底端 9mm 上 位 2mm 底部厚：中央部 8mm 端部寄り 5mm	内外表面： ナデ。ローリングを受けている。 外底面：糸切り磨し後、ナデ直し。	色調：鈍い棕色。 出土地点：I 第②
38	7.3	6.3	1.3	0.86	68°	皿。 体部は肉太で、内湾気味に立ち上がる。 外表面は丸味を帯びる。口唇部は丸味を帯びる。やや上げ感。 体部厚：外底端 9mm 上 位 4mm 底部厚：7mm	内表面：ナデ。 内底面：ナデ。 外表面：丁寧なナデ。 外底面はやや角張る。 外底面：糸切り磨し。	色調：鈍い棕色。 出土地点：I 第③
39	9.1	7.5	1.8	0.82	70°	皿。体部は肉太で直線的に伸びる。 口唇部は丸味を帯びる。 体部厚：外底端 1.1cm 上 位 4mm 底部厚：1cm	内外表面： ナデ。ローリングを受けている。 外底面：ローリングが激しい。糸切り磨し後は消滅。	色調：桃灰色。 外底面は灰褐色。
40	7.6	6.0	1.4	0.79	67°	皿。体部は肉太で、内湾気味に伸びる。外表面は大きく丸味を帯びる。 口唇部は丸味を帯びる。 底部は体部に比べて、かなり薄層である。 体部厚：外底端 8.5mm 上 位 6mm 底部厚：4~5mm	内外表面： ローリングが激しい。 外底面：糸切り磨し。	色調：赤褐色。
41	8.1	5.5	2.2	0.70	61°	皿。 体部は下位より上位にかけて漸次、先細りとなる。やや内湾気味ながら直線的に伸びる。口縁直口。 体部の立ち上がりは大きく窪む。やや上げ感。 底部は大きく肥厚する。 体部厚：下位 8.5mm 中位 4mm・上位 2mm 底部厚：中央部 1.2cm 端部寄り 1cm 外底端 1.3cm	内外表面：横ナデ。 外底面：ローリングが激しい。糸切り磨し後は消滅。	色調：乳白色。 出土地点：I 第④
42	9.1	7.4	1.8	0.81	68°	皿。体部は肉太で、直線的に伸びる。 口唇部は丸味を帯びる。 底部は体部に比べて薄層である。 体部厚：外底端 1cm 上 位 6mm 底部厚：7mm	内外表面：横ナデ。 内表面：ナデ。 外底面：糸切り磨し。	色調：鈍い灰棕色。 出土地点：I 第⑤

第 1 表 遺物観察表(4)

No.	注 量 (mm)			底径と口径の比較	作部の立ち上がり角度	形態の特徴	手法・調整	備考
	口径	底径	器高					
43	9.2	7.0	1.9	0.76	64°	皿。 体部は僅かに外弯する。 上げ底。 体部厚：外底端 1.2cm 上位 3mm 底部厚：0.9~1cm	内外器面：ローリングを受けている。 内底面：ナデ。 外底面：糸切り難し。	色調：鈍い藍色。 外底面は灰藍色。 出土地点：I郭①
44	8.9	6.8	1.9	0.76	63°	皿。 体部は内弯気味に伸びる。 外器面は丸味を帯びる。 体部厚：外底端 1.1cm 上位 3mm 底部厚：8~9mm	内外器面：横ナデ。 外底面：ローリングが激しい。糸切り難し底は削減。	色調：孔褐色。 出土地点：I郭①
45	10.1	9.3	2.6	0.91	82°	皿(口縁部を僅かに欠く)。 体部・底部とも肉太である。 底部は端部寄りから外底端に向かって、反上がりとなる。 体部厚：外底端 1.3cm 中位 7mm 底部厚：1.1cm	内外器面：横ナデ。 内底面：ナデ。 外底面：糸切り難し。	色調：灰褐色。 一部、鈍い藍色。 出土地点：I郭①
46	9.3	8.0	2.0	0.86	75°	皿、やや上げ底。 体部は直線的に伸びる。 体部厚：外底端 1cm 上位 4mm 底部厚：8~9mm	内外器面：横ナデ。 内底面：ナデ。 外底面：糸切り難し後、ナデ。	色調：鈍い藍色。 出土地点：I郭①
47	11.1	6.9	2.9	0.63	55°	杯。 体部は直線的に伸びる。 底部の中央部はやや肥厚する。上げ底。 体部厚：外底端 1.1cm 中位 7mm 上位 3.5mm 底部厚：中央部 1.1cm 端部寄り 9mm	内器面：ローリングを受けている。 内器面：ローリングを受けている。 外器面：横ナデ。 外底面：糸切り難し。	色調：鈍い藍色。 出土地点：I郭①
48	11.7	7.8	3.4	0.67	60°	杯。体部は下位から上位にかけて漸次、先細りとなり、直線的に伸びる。 口縁直口。 体部厚：外底端 1.1cm 中位 7mm 上位 3mm	内外器面：横ナデ。 外底面：糸切り難し。	色調：桃灰色。
49	12.0	7.8	2.5	0.67	51°	杯。体部は中途でやや外弯する。 口縁部は丸味を帯びる。 体部厚：外底端 9.5mm 中位 7mm 上位 8mm 底部厚：6.5~7mm	内外器面：ナデ。 外底面：ローリングにより糸切り難し底は、殆ど消滅。	色調：鈍い藍色。
50	12.0	8.1	3.2	0.68	60°	杯。体部は肉太で、直線的に伸びる。 外底端は削減する。 体部厚：外底端 1.3cm 中位 9.5mm 上位 5mm 底部厚：0.9~1cm	内外器面：ローリングを受けている。 外底面：糸切り難し底は削減。	色調：陶灰色。 焼成：堅緻。 出土地点：I郭①
51	11.7	7.5	2.6	0.68	50°	杯。体部は直線的に伸びて外器面で直線、内器面で二日月状を呈する。 口縁直口。 体部厚：外底端 1cm 中位 7mm 上位 4mm 底部厚：9mm	内外器面：ナデ。ローリングを受けている。 外底面：ローリングが激しい。糸切り難し底は消滅。	色調：桃灰色。

第12表 遺物観察表(5)



第18図 遺物実測図(4)

No.	度量 (cm)			口径と口径の比較	体部の立ち上がり角度	形態の特徴	手法・調整	備考
	口径	底径	器高					
52	13.0	10.0	2.9	0.78	50°	杯。体部は肉太で、直線的に伸びる。 口唇部は丸味を帯びる。 底部は肥厚する。内底面の溝部は大きく窪む。 体部厚：外底端 1.2cm 中位 8mm 上位 6mm 底部厚：1.1cm 溝部寄り 8.5mm	内外面：丁寧なナデ。 内底面：ナデ。 外面：横ナデ。 外底面：糸切り磨し後、ナデ消し。	色調：灰褐色。 出土地点：I郭①
53	11.3	7.6	2.8	0.67 ~ 3.0	60°	杯。体部は肉太で、直線的に伸びる。 口唇部は肉太ながら、やや先細りとなる。 内底面は中途より溝部にかけて大きく窪む。 体部厚：外底端 1cm 中位 8mm 上位 4mm 底部厚：0.95~1cm 溝部寄り 7.5mm	内外面：横ナデ。 内底面：ナデ。縦線が残る。 外面：糸切り磨し。	色調：鈍い藍色。 出土地点：I郭①
54	13.5	9.2	3.0	0.70	55°	杯。 体部は肉太で、直線的に伸び、内外面は直線的。外面はやや先味を帯びる。 底部は体部に比べて、厚い。平底。 体部厚：外底端 9mm 中位 9mm 底厚：7mm	内外面：ローリングを受けている。 内底面：ナデ。 外面：横ナデ。 内底面：ナデ。縦線が残る。	色調：赤褐色。 出土地点：I郭①
55	11.6	8.3	3.1	0.72	64°	杯。 体部は肉太で、直線的に伸び、内外面は直線的。外面はやや先味を帯びる。 体部の立ち上がりは、やや窪む。 体部厚：外底端 1.1cm 中位 7.5mm 上位 4mm 底部厚：0.9~1cm	内底面：ローリングを受けている。 外面：横ナデ。 外底面：糸切り磨し。	色調：鈍い藍色。 出土地点：I郭①

第13表 遺物観察表(6)




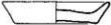

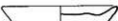
### 土師器の形態分類

〔皿〕 36・37は口径6.0cm、底径4.8~4.9cmに収まり、c類よりもさらに一回り小型で、一次調査分には無いタイプである。舟型タイプの最も小型の皿といえる。38・40はc類に属する。41は器形的にa類に属するが、大型で、法量の面で異なる。新しいタイプの皿である。42~44・46は大型の皿でe類に属する。45は口径10.1cm、底径9.3cm、体部の立ち上がりは82°を測る。器形的にもこれまでのものと異なっている。

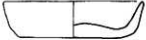
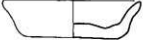
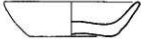

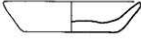
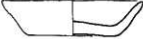
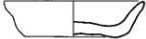
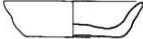
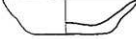
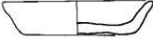

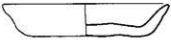
出土数は少ないが、皿に関しては新しい資料が目立つ。なお、前回の調査で最も出土量の多かったd類の出土はなかった。

〔杯〕 二次調査分で新しいタイプのものはない。一次調査で12種に細分した杯の中で、今回は6種類が出土した。47はl類、48・51・53はh類、49はi類、50はj類、52・54はq類、55はp類に属する。

〔大田〕

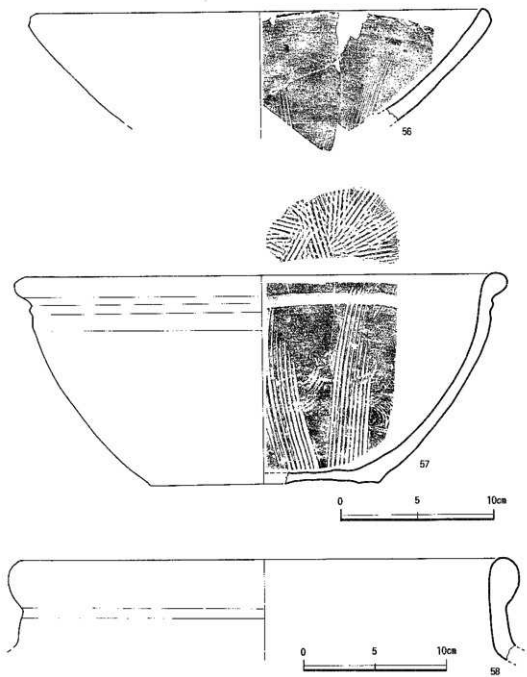
分類	代 表 例	分類	代 表 例
a類		d類	
b類		e類	
c類		f類	

第14表 土師器(皿)形態分類表

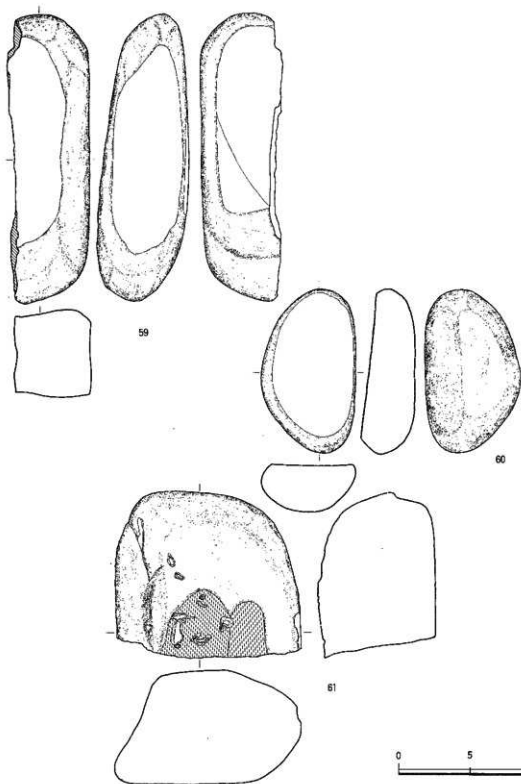
分類	代 表 例	分類	代 表 例
g類		m類	
h類		n類	
i類		o類	
j類		p類	
k類		q類	
l類		r類	

第15表 土師器(杯)形態分類表





第19図 遺物実測図(5)



第20区 遺物実測図(6)

No.	器 種	形 態 の 特 徴	文 様 ・ 手 法 ・ 調 整	備 考
56	楕 鉢 (唐津地) 15C末 ～16C	体部はやや内湾気味に、外側へ大きく開く。 飯元口径: 30.4cm 口唇部は6mm幅で扁平であるが、 底部は直む。 体部厚: 下位1.1cm・中位 8.5mm 上位 1cm	内器面: 条線の一単位は6本。 外器面: 横ナデ後、指押ええ。	色調: 灰茶色。 焼成: 厚焼。 出土地点: I郭①
57	楕 鉢 15C末 ～16C	体部は内湾しながら、外側へ開く。 口唇部は大きく肥厚する。 口径: 32.5cm 器高: 13.8cm 底径: 15.1cm 体部厚: 底縁端 1.2cm 中位 6mm 上位 7mm 口唇部 1.3cm	内器面: ナデ。条線の一単位は9本。上位に、条線をナデ消す7mm幅の凹線(横位)が走る。 内底面: ナデ。器面一杯に条線が横かかっている。 外器面: ナデ。上位に2本の凹線(横位)。	色調: 小豆色。 外器面に緑黄褐色の自然釉がかかる。 出土地点: I郭② (土坑)
58	楕 鉢 15C ～16	口唇部で大きく肥厚(2.1cm)する。 飯元口径: 36cm 体部厚: 1.2cm		色調: 内器面は小豆色。 外器面は青茶色の器面に黄灰色の自然釉がかかる。 出土地点: I郭①
59	砥 石	長さ 22.8mm 最大幅 6.9mm 厚さ 6.0～7.0mm 重さ 1,576.5g	残存部分では三面使用が認められる。いずれの面も平均的に使用されており、刃止まりの段もない。 裏面に2つの異なる研ぎが見られるが、両側面が当初の使用面であり、他方はその後の使用面である。	出土地点: I郭①
60	砥 石	残存長さ 12.0cm 残存最大幅 14.4cm 最大厚さ 9.0mm 重さ 498.0g	正面部だけの使用である。残部の平面に対して、水平部と側部の2面の使用が認められる。水平部の寛れは故意に付けられたものか不明。	出土地点: I郭②
61	砥 石	長さ 13.0mm 最大幅 7.5mm 最大厚 3.7mm 重さ 2,274.7g	河原石(円礫)を使用したものである。片面の使用で、その面は良く使い込まれている。磨研品として固定されて使用されたものと思われる。	出土地点: I郭②

第16表 遺物観察表(7)

## 第IV章 まとめ

### (1) 検出遺構

#### 1. 柱 穴

I郭-①から38個、I郭-②から137個、計175個の柱穴が検出された。直径は20～40cmでいづれも地山に深く掘り込まれており、平均の深さは30cmを超えた。

多くの柱穴の埋土には土師器(糸切り)の細片が混じっており、大半が河内蒲城に関連した柱穴と思われる。しかし、他の中世城跡の調査結果と同様に数多くの柱穴が検出されたにもかかわらず、確たる建築址の復元は5棟に止まった。

柱穴の並びに関し、今回の調査ではI郭-①から2列の欄列が復元された。

### 〔掘立柱建築址〕

復元棟数は、I郭-①で2棟、I郭-②では3棟であった。建物は中世城の性格から倉庫と思われるが、SB01は望楼、SB05は武将の詰め所的なものとの見方もできる。

建物のプランは正方形のもの(SB01・SB03・SB04)と長方形のもの(SB02・SB05)とに大別される。

SB01 4本柱の建物で他と異なる構造である。検出箇所が城跡の北端、最高所である事から、構組みの望楼址の可能性がある。

SB02 柱穴の並びはやや不規則であるが、他の4棟と異なり2間×3間の総柱タイプの建物である。造りは典型的な倉庫である。

SB03・04 中柱の無い側柱だけの建物である。この建物の構造は中世城に普遍的である。

SB05 側柱のみの建物であるが、桁行7.8m、梁行妻3.5mで大型である。柱穴を見るとしっかりとした造りの建物という観がある。

### 〔欄 列〕

数多くの柱穴の中には、欄列と思われるものが幾つかある。その中でも、I郭-①の東西両棟のものは存在が確実である。これらは土塁留めの枕列とも考えられるが、建物と近接しすぎるために、土塁の存在は考えられない。

### 2. 集石状遺構

中世城からしばしば検出される集石の類が河内浦城跡からも検出された。但し、角礫の集合度合はやや散在的である。

### 3. 敷石状遺構

遺構の解明はできないが、遺構の西側に近世瓦がまとめて出土している所から敷石自体は、河内浦城の廃城後のものと考えられる。近世寺院に関連する遺構の可能性もある。

### 4. 土 城

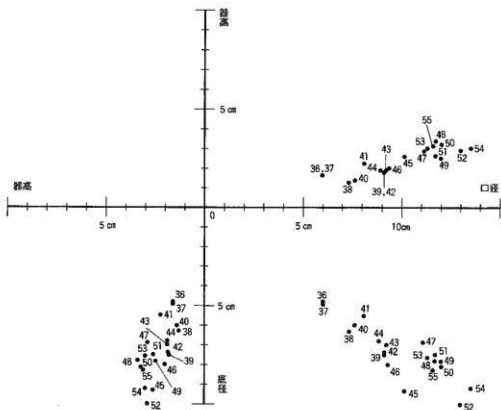
出土遺物から17世紀初頭の土城であることが判る。时期的は河内浦城が廃城される頃に掘られたものである。遺構の性格は不明である。ただし、遺構の形状から近世墓域の可能性も残る。

## 〔2〕出土遺物について

1.磁器の染付碗・皿(1~13) 16世紀後半のものが大半を占めるが、中に17世紀に下るもの(2)もある。4・9は中国からの輸入磁器で、9は景德鎮産である。

2.染付の蕃笥皿(14~19) 16世紀の中葉から末頃までのものであるが、唯一、14のみが16世紀末頃に限られる。点描き文様は太めで、他のものとは異なる。

3.青磁(20~24) 時代の判るものは3点である。21は15世紀後半から16世紀、22は15世紀末から16世紀前半、24は14世紀後半から15世紀初頭である。青磁の年代はやや古い傾向にある。



第17表 土師器(皿・杯) 法量表

- 4.白磁の碗・皿(25~28) 16世紀代のものである。25は中国からの輸入品である。
- 5.唐津焼皿(29・30) 29は16世紀、30は16世紀末から17世紀初頭のものである。29は器面にワラ灰釉がかかる。
- 6.陶器皿(31~33) 17世紀初頭のもので、32・33は同一土域からの出土品である。廃城期の遺物である。31は地元(熊本)の窯で焼かれたものであろう。
- 7.近世磁器蓋(34) 広東型の形状を呈する。時代は大きく下り、18世紀後半から19世紀中期のものである。近世寺院、もしくは一次調査で検出された江戸時代の墓域に関係する遺物であろう。
- 8.瀬戸・美濃陶器皿(35) 16世紀代のものである。一次・二次調査を通じて、1点(個体数は2)のみの出土である。
- 9.糸切り土師器(36~55) 36~46が皿、47~55が杯に分類される。一次調査では90点近くの出土があったが、二次調査では19点に止まった。

一次調査のものと比較した場合、杯に新しいタイプのものは無い。i類・h類・i類・j類・q類・p類の6種が出土した。皿については新しいタイプのものが3種類ある。36~37はc類

※ 第1次調査(平成元年度)出土遺物

※ 第2次調査(平成3年度)出土遺物

	出土遺物				年代	出土遺物							
	青磁	白磁	半磁器	その他		染付碗・皿(磁器)	茶筒 皿	青磁碗	白磁碗・皿	唐津焼皿・摺鉢	陶器	備前	
14 C					後								
15 C					初								
					前								
					中								
					後								
16 C					初								
					前								
					中								
					後								
17 C					末								
					初								
					前								
					中								
				後									
				末									

第18表 遺物年代別分類表

よりも一回り小型である。41は器形的にa類であるが、法量の面で異なる。大型である。45は器形的にこれまでのものと大きく異なっている。

一次調査で、最も出土量の多かったd類の出土は無かった。

10.唐津焼の襷鉢 (56・57) 15世紀末から16世紀のものである。

11.備前の甕 (58) 15世紀から16世紀のものである。

12.磁石 (59～61) 3点の出土があった。

### 〔3〕まとめ

河内浦城の年代は一次調査の結果、土塚からの出土遺物により15世紀中葉から16世紀後半としたが、今回、本体部分(Ⅰ郭-①・②)の調査で、城の最終的な実年代は16世紀中葉から後半に限定され、一部は17世紀初頭にかかる事が判った。出土遺物は大半のものがこの時期である。

以上の事から河内浦城の廃城は元和元年(1615年)の一国一城令であった可能性が高い。今回の二次調査で河内浦城の最終時期が判明したと思われる。

〔大田〕

### 〔4〕総括

河内浦城跡の位置は、東シナ海に連なる沈降海岸である羊角湾が深く湾入した最奥部にあり、天草有数の河川である一町田川河口の右岸山稜の末端部である。現在、大草山崇園寺を含む裏山一帯が城跡である。

この城跡については、昭和50～52年度に熊本県教育委員会が国庫補助を受けて実施した、熊本県中世城跡緊急調査(『熊本県の中世城跡』熊本県文化財調査報告第30集 1978年)の段階ではほとんど実態がわかっていなかった。つまり、一町田川を挟んで対岸の「城山」についてはある程度の把握ができていたのに対して、この地については「城山の北西方向300mにも城跡と伝わる所があるが、現在、この地は崇園寺境内となっている」と記載された程度のものであった。

しかし、その後、河浦町・河浦町教育委員会の御努力、及び崇園寺の手柴清人氏の御理解と御協力によって、城跡の姿が次第にわかるようになってきたことは文化財保護の立場から、大変喜ばしい事である。

まず、平成元年度の第1次調査によって、第2図 城郭模式図 に示す通り崇園寺の西側の南北に延びる二股の尾根、その基部などに城跡としての遺構が存在することが確認された。また、この調査では二股尾根のうち東側尾根の南端、帯曲輪部の一部について発掘調査を行い、堀切及び掘り込み穴を検出し、城跡の遺構について手掛かりを掴むことができた。この発掘調査では部分的ではあったが、急傾斜を持つ堀切によって、現在の崇園寺の区域と区画する重要な施設であること、及び遺物から15世紀中葉から16世紀後半の時期であることが確認できたわけで

ある（第1章 第4節 河内浦城跡の基本的な構造と第一次調査分の検出遺構 参照）。

今回、平成3年度の調査は、第1次調査を行った帯曲輪の北側にある主郭部である。この主郭は第3図 城跡全体図、第4図 I郭実測図の通り南北に狭長な平場を、ほぼ中央で切断し、二つの平場から成っている。発掘調査の結果、掘立柱建築址、横列、柱穴群及び集石状遺構等が検出された。

まず掘立柱建築址はI郭-①から2棟、I郭-②から3棟の計5棟を確認した。I郭-①では最高所に当たる北端に4本柱で、おそらく望楼的な機能を持つもの。南寄りの所に2間×3間の総柱をもつ倉庫と推測されるものである。この建物及び平場を囲む状態で東側と西側に横列を配している。

I郭-②では、中柱の無い側柱のみの掘立柱建築址3棟が検出され、その内、SB03・04ともに東側と西側の柱間が変則的な形態をもち、SB04は南側だけに間柱を持つ。また、SB05も同様に変則的な2間×4間の長方形プランを持ち南側だけに間柱を持つ。

この他、敷石状遺構が検出されたが全体を把握するまでに至らなかった。

出土遺物としては第18表に示す通り、14世紀後半～16世紀の青磁、16世紀代の白磁のほか、15世紀後半～17世紀前半の唐津焼・瀬戸焼・備前焼等が見つかっている。第一次調査段階では城跡の年代を15世紀中葉から16世紀後半と推定した所であったが、今回の調査によって城の年代が16世紀中葉から後半に該当し、一部は17世紀初頭まで下る事が判ったことは大きな収穫である。このことは鶴田倉造氏も指摘されている通り、元和元年（1615年）の一国一城令との関連が推察できるものである。

〔 限 昭 志 〕



## 〔付論1〕 河内浦と天草氏、その後

鶴田倉造

前号(『河内浦城跡』1990年3月発行)において、鎌倉時代から戦国時代まで約400年間にわたる、天草氏と河内浦についての関係史料を紹介し、簡単な解説を加えておいた。今回はさらにそれを受けて、終末期の事について史料に基づき、考察を加えてみたい。

### 1. 天草氏、天草支配の終焉

前号において、天草氏は征西大將軍や大宰大監等を動めた九州の豪族、原田氏の一族であり、鎌倉時代から戦国末期までの約400年間、天草下島の南東部を支配した天草最大の雄族で、河内浦はごくその初期を除き、始終その中心的拠点であったことを述べておいた。

例えば、貞永2年(1233)の『天草種有の譲状(案)』によれば、当初の天草氏の領域は本渡から河内浦、産島、平浦、大江、高浜等を含む一帯であったと考えられるが、これは永禄12年(1569)頃の『フロイスの日本史』にある次の領域とはほぼ一致するものと思われる。

「天草殿の領域は長さ4里、幅はところによって4～5里、または2里程で、領内に35の集落があり、殿の主な居宅は河内浦という地にある」云々。

ただ、僅かに相違する点は、天文年間までは長島や獅子島も天草氏領であったのに、永禄年間に至って島津氏の領地となり、天草から分離した事ぐらいであろう。

ところが、戦国末期になって、天草氏の身上にも幾つかの大きな危機が訪れる。本稿においては、その危機に天草氏がどう対処したか、という点を中心に論を進めることになる。

第一の危機は、天正15年(1587)の秀吉の島津征伐である。殊に、当時、天草五人衆は島津氏に従って豊後に出兵していた。しかし、秀吉の勢力が意外に大きい事を察知して転身し、僅かに地位を保つ事ができた。

第二の危機は、天正17年(1589)の天草合戦である。実は、この戦の原因については、従来、本戸城主・天草伊豆守と志岐鶴泉が、小西行長の宇土築城に反対したからとされていたが、むしろ天草五人衆の豊臣政権の締め付けに対する反抗と考えた方がよさそうだ。事実、行長は、天草氏はキリシタンだから救いたいと考えて、先ず志岐の攻撃から始めているし、また、努めて和平裏の降伏を勧めてもいるのである。しかし、天草氏は志岐城が落ちてでも反抗を続けたので、領内第二の城で、皆の城でもある本渡城を攻めるのである。結局、この時も河内浦の本城は攻めていない。

またこの事に関連して、従来、余り取上げられなかった面白い史料が『肥後古記集覽』にある。それは『天草合戦覚書』というもので、次の様に書いてある。

「本天草はさしの津という所に居住す、度々の合戦に清正大利を得給ふと聞き、叶わずと思

い、行長を頼み、清正に暖を請う、霜月26日さしの津を行長に相渡す、清正萬歳を悦び給う、同27日乗船あり、明る28日の早天に熊本に帰陣あり」云々。

すなわち、この戦いに領主の天草久種は崎津まで出陣していたが、志岐城も落ち、本渡城も落ちたと聞いて、とても勝ち目はないと考え、崎津を小西行長に渡す事を条件に、清正にとりなしを依頼したというものであろう。

この時、志岐は完全に落城降伏したので、小西領となり城代として日比屋了荷が派遣されたが、天草領については本波や崎津が小西領(蔵入地)とされて、その代官は多分、天草久種の弟の天草新助(種倫)が任せられたものであろう。

フロイスはジョアン天草と小西行長との和解が成立したのは、天正19年(1591)正月、室津(兵庫県)においてであったとしているが、多分この時、コレジヨ(学院)天草移転の事も協定されたものであろう。実際にコレジヨを天草に移転する事の裏には、前年の天草合戦によって両者の間に生れていた隔意を修復するという意図があった事を注目しなければならない。

第三の危機は、文禄元年の梅北一揆をめぐる危機である。この一揆にはドン・ジョアン天草の従兄弟に当る柄本氏が加担していたし、先年、志岐を退出した志岐一族も関係していた疑いがある。その為、それまで在地居住を許されていた上津浦氏や人欠野氏・柄本氏等は肥後移住を命ぜられた。ドン・ジョアン天草は当時、行長に従って朝鮮に出兵していたが、その家族はコレジヨが河内浦にあったため、元通りの居住を許されている。

第四の危機は、朝鮮出兵に伴う危機である。天草殿ドン・ジョアンは、文禄の役にも慶長の役にも従軍したようで、次の5つの関係史料がある。

〔その1〕 フロイス日本史 第2巻 216頁

小西行長に従って出陣した者の中に天草久種(ジョアン)・大矢野種量(ジョアン)・上津浦殿・志岐の日比屋了荷(ヴィセンテ)・宗義智等の名が見える。(文禄元年;1592)

〔その2〕 フロイス日本史 第2巻 258頁

文禄元年(1592)5月末、臨津江を渡る時かと思われる記事の中に、船がなくて渡河が困難である旨を、天草殿ドン・ジョアンが報じたとある。

〔その3〕 フロイス日本史 第2巻 268頁



天草久種(ジョアン)の署名・花押  
(慶応大学図書館蔵「相良家文書」)

朝鮮に陣中慰問に向いたセスベデス神父が熊浦城を訪れた時の記事に、有馬・大村・五島・平戸・天草・栖木の諸氏が、海岸の小高い所に居を構えているとの記録がある。

【その4】 フロイス日本史 第2巻 281頁

1593年1月、平壤をめぐる戦いで、ドン・ジョアン天草は家臣30余名を失い、彼自身も5ヶ所に矢を受け、危機に陥ったことを記している。その部分を抜粋紹介すれば、「天草のドン・ジョアンは、戦闘当日、何人にも劣らぬ働きぶりを示した。彼はアゴスチノ(行長)の眼前で、極めて凛々しく勇敢に戦い、自分の乗馬が殲されると、すかさず率いていた代馬にまたがって奮戦した。だが、その馬もまた殲されたので、非常に危険に陥った。もし彼の家臣が、敵の刃から彼を守っていなければ、彼は落命していた事であろう。その家臣は実に忠実で、己の生命よりもドン・ジョアンの生命を重んじ、敵の攻撃を身をもって食い止めた。そして彼は死に、ドン・ジョアンは助かったのである。(中略)

彼は直ちに戦地から日本に宛、自分の生命を助けてくれた家臣の妻に食料と禄を与えるようにと書き送った」

以上、四件は文禄の役における史料であるが、慶長の役についても次のような史料がある。

【その5】 鹿児島県史料 旧記雑録後編三 132頁

「博山久高譜中南原城攻圍圖」に1,000人を率いた天草弾正忠の記事がある。当時、1,000人を率いて出征していた天草氏は、ドン・ジョアン天草(久種)以外考えられないので、久種は弾正忠を称していた事が判る。また、当時九州の軍役は100石につき6人だったと言うから、それから計算すれば、一万六千六百石程の知行高になる。

以上が文禄・慶長の役における天草氏についての記事であるが、この遠征では大矢野種基・種量父子や栖本道隆も討死しているし、天草久種もすんでのことに討死する所だった事がわかる。

最後にドン・ジョアン天草については、慶長6年(1601)2月25日付、カルヴァレオの青翰の中に次の様な記録がある。これは関ヶ原の戦いの後の事であり、これを最後にしてドン・ジョアン天草が歴史の上から姿を消す点で甚だ貴重な史料であるが、詳細が不明である事が大変残念である。内容は

「天草から長らく追放されていたドン・ジョアン天草は、小早川金吾殿を信頼して家臣となった。彼は現在、金吾殿から扶持を与えられており、それによって自らと、およそ800名の徒臣を十分に養う事ができる」云々。

文中、「天草から長らく追放されていた」というのはどの様な事を指すのか不明であるが、金吾殿というのは、関ヶ原の役で東軍を勝利に導いた小早川秀秋の事であり、その戦功によって備前の国主に取り立てられているから、ドン・ジョアン天草も800人の家臣とともに備前におもむいていることは確かである。前後の事情から考えると、あるいは彼も関ヶ原の戦に参加しているのではないかとも思われる。

弟の天草新助(種倫)や天草喜右衛門(種真)等は、役後、清正に仕え、後、子孫は細川家臣と  
なって幕末に至っているが、ジョアンの最後については不明である。

## 2. コレジヨ(学院)と河内浦城のその後

天正19年(1591)7月25日、4人の少年遣欧使節が河内浦のノビニアド(修練院)でイエズス会  
に入会した日、ジョアン天草は自らの館で彼らに中食を振る舞っている。その館というのは現  
在の崇園寺の場所であったに違いない。その翌年から彼は行長に従って朝鮮に渡るのであるが、  
その留守中の文禄元年(1592)6月、肥後で梅北一揆が起こっている。前述の通りこの一揆には  
天草からも加担者があった為に、上津浦氏・大矢野氏・栖本氏等は家臣を引き連れて、肥後移  
住を命ぜられるのであるが、天草氏の家族は河内浦にコレジヨがあった為に、従来通り河内浦  
居住を許された。しかし、翌2年(1593)には長崎奉行寺沢弘高の家臣が木材を探しに天草へ来  
島すると噂が伝わり、河内浦のコレジヨを目立たないようにする為に、一部を大江と久玉に  
分散させた。その時、河内浦の教会や修練院には、間仕切りを施して住宅に見せかけ、殿の母  
堂や夫人が移り住んだとある。

また天正19年(1591)、河内浦に設立されたコレジヨは、慶長2年(1597)秋、一時閉鎖して長  
崎に移されたが、慶長4年(1599)3月セルケイラ司教やカルヴァリオ神父等が30名の学生と共  
に河内浦に移住した時、在来の施設を利用したというから、少なくともその時まではコレジヨ  
の施設は残っていたと思われる。

さらに、河内浦城はその後も存続していて、慶長6年(1601)天草が寺沢領になった時、寺沢  
弘高は天草各地の城に家臣を配置している。

『並河太左衛門覚書』によれば、天草の城が破却されたのは元和元年(1615)の一国一城令の  
時で、その時まで河内浦城に詰めていたのは自分の父並河兵右衛門宗政であったとしている。  
従って、河内浦城の最後は1615年であり、最後の河内浦城代は並河宗政である事が判る。1615  
年に河内浦城は破却されて屋敷構えとなり、郡代屋敷になった。

初期の郡代については史料がないが、最後の河内浦郡代となったのは中嶋与左衛門であった。  
しかし、この中嶋与左衛門は、寛永14年(1637)の天草島原の乱に配下を引き連れて島子まで出  
陣したにもかかわらず敗軍し、殊に河内浦には一揆が攻め寄せ気遣いもなかったのに任地を捨  
てて逃げ出した為、乱後追放されている。従って、乱後、松平信綱が河内浦を訪れた時は与左  
衛門は河内浦に居なかったと思われる。

また、乱後、天草を拝領した山崎家治も「島内には船着場が多く、所々に人数を配置したい  
と思うけれども、私の分では不可能」(山崎移封録)としているので、各地の郡代は空席のまま  
であった可能性が高い。

その郡代制が廃止されて、全郡が10組86ヶ村に再編されるのは、寛永18年(1641)の代官鈴木

重成によってである。かくて無用となったかつての郡代所跡に、正保2年(1645)浄土宗の天草山崇園寺が創建されるのである。

従って、河内浦城は創建の時期が不明ではあるけれども、以後の変遷を表示すれば、次のようになる。

-----	～ 1615年	河内浦城	〔城構時代〕
1615年	～ 1641年	河内浦郡代所	〔屋敷構・郡代所時代〕
1645年	～ 現在	崇園寺	〔寺屋敷時代〕

## 〔付論2〕 天草氏居城河内浦城跡の史的考察

鶴田八洲成

### はじめに

この度、河内浦城跡の第二次調査があり、平成元年度の第一次調査に引き続いて多くの成果があった。河内浦城跡については、小生の場合、河浦高校在学中(昭和40～48年)に個人的調査で、何回も城跡へ登城したことがあった。その後(昭和50年)、県文化課による県下城跡一斉調査のとき、小生は天草地域の調査を担当したが、そのとき河内浦城跡については特に関心を持って河浦町教育委員会の協力援助で実施した。それらの調査報告は「天草建設文化史」に収録されている。ただし、それは城跡確認調査の外観的(表面)調査で、本格的な発掘調査ではなかったため、現在では修正補足を要する部分が多々あるであろう。

この度の二次にわたる調査は、県文化課の大田幸博氏、松舟博満氏によって河内浦城跡の総合的調査による全体的解明の方向で、本格的な調査がなされつつある。これを町教育委員会が主催し、崇園寺が協力して実行し、町民への理解が深まりつつある。

こうした中で、第二次調査報告書の末尾に関係者の一人である小生に小稿執筆の依頼があったので、現段階での私的考察をまとめておくことにしたい。

### 一、河内浦城の歴史的意義の再認識

河内浦城は天草氏の居城としてよく知られつつある。そしてその歴史的意義が高くなりつつある。ここにその歴史的意義について幾つかにまとめられるであろうが、次に二つにまとめて見たい。

一つは、河内浦城が中世期天草五人衆の筆頭〔天草最大の領主〕として展開し、天草の歴史を形成してきた天草氏の居城であったということ。

二つは、河内浦城がコレジヨの教育文化に象徴される南蛮文化(西欧文化)を天草の地に開花させた領主、天草氏の居城であったということ。

前者の方を補足すると、当時の天草五人衆というのは、下島中部南部を領した天草氏が、下島北部の志岐氏、上島南西部の栖本氏、上島北中部の上津浦氏、上島東部と大矢野島の大矢野氏、この四氏に比して最大の領主であった。そして、常に天草氏は天草地域史の特にキリシタン史の中におけるその歴史的行動と軌跡が最も多く重みを持っている。

天草氏の居城は、天草五人衆の居城が、志岐氏は志岐の地、栖本氏は栖本の地、上津浦氏は上津浦の地、大矢野氏は大矢野の地に存在するように、天草氏の居城は、第一の城(本城)が河浦の地に、第二の城(支城)が本渡の地に存在したのである。すなわち、河内浦城の天草氏と本渡城の天草氏の二つの天草氏が、河内浦城を本城、本渡城を支城として天草の地域を主体として歴史的行動の展開がなされたのである。

後者の方を補足すると、キリスト教の大神学校であるコレジヨが、当時の西欧の最高の学問を教育する学院として、まず豊後の府内に1581年に設置された。その後、情勢と条件の変化によって所在地の変遷をたどり、長崎の地に存在したのを最後に、1614年、日本からマカオに追放される。その33年間の内、1591年より7年間が、天草の河浦に存在しており、それが天草コレジヨである。しかも天草におけるコレジヨが一番充実し盛んであったことが、当時のコレジヨの変遷を紐解けば明らかである。

コレジヨ〔大学〕ではテキストを印刷する印刷所が併設されていたが、それが当時最新であるドイツのグーテンベルグ印刷機を導入し、しかも、これまでの木版印刷に変わって、活版印刷を実働化したのである。ここで出版した印刷本は「ドチリナ・キリシタン」「イソップ物語」「平家物語」「羅葡日対訳辞典」等に代表される「天草版」または「天草木」と呼ばれ、世界の文化遺産となっている。

この印刷本をテキストとして教育が実施された天草コレジヨは、当時、日本の最高洋式学府として、日本全国の教育文化センターとして、その役割を果たしたのである。なお、日本人が最初に西欧に学んだ天正遣欧四少年が、新式印刷機をヨーロッパより導入し、彼ら四少年は帰国と同時に、さらに学問を深めたのも天草コレジヨ、すなわち河内浦の地であった。このような教育文化史上重要なコレジヨを設置したのが、最後の天草氏(久積：ジョアン)であり、その居城が河内浦城であったということである。

## 二、河内浦城と天草氏についての先達説

天草氏の河内浦(現河浦町)における城跡についての現代記録は「河浦町郷土史」の第一輯(昭和33年刊)と第二輯(昭和35年刊)に、前者が宮崎久松氏、後者が山腰雅春氏の、ともに郷土史家によるのがあるのみである。

その後、城跡についてではないが、天草氏の歴史的存在について、これまでの通説を修正する鶴田倉造氏の論考がある。(後述)

まず、宮崎氏の河浦の二つの城跡について見てみよう。

「河内浦城跡」については「その城地は崇園寺境内続きで、南は吉原、北は下津原の堂の尾に境する地域で、建武四年に河内浦三郎入道が志岐高弘に旧領返還を要求して挙兵したのはこの城であると云われている」

「下田城跡」について「下田城は天草伊豆守鎮種が元亀元年本渡移城前の居城である」「城跡は川の左岸の山腹にある」

次に、山腰氏の河浦の二つの城跡について見てみよう。

「河内浦古城」については「正和以降、天草氏二分して河内浦に在城以来連続として続いた城跡で、今の天草山崇園寺のある所は昔の城地、山門は大手門の跡と伝える。背後の丘陵には2～3箇所、城砦の跡と思える空地あり、案ずるに天草氏はこの稜線上に小城砦を連ねて、本丸、二の丸、出丸などの威容を誇ったのであろう。干拓以前は大手門の真下で小船舶の出入りは出来た。(中略)戦国末のキリシタン崩れにより鎮種が本渡に去った後は、城跡荒廃して今を見る由もない」

「下田城跡」については「馬場・辺田菅原神社を祭る小丘陵に關る丘陵台地で、今も本丸と呼び、畑三反歩位の平地があり、昔の石垣らしいものの残片もある。この二丘陵の間にも四反歩位の平地あり、居館を構えるには十分の地勢である。おそらく城主は天草氏の一族で、家臣等は丘陵下の平地に住んだものであろう」

「天草氏は初め河内浦古城にあり、後一族繁榮して支城を下田城においたのであろう。キリシタン崩れ当時の弟某というのは、多分下田城主で、信福寺の法師とは相提携するに至近の距離であった」

上記のようなことから、二氏による共通することは、現崇園寺の所が「河内浦城」で、現天満宮の所が「下田城」で、この二つの城が存在していたこと。見解が相違するのは、築城したのが「河内浦城」で、途中天草氏は下田城を本城としていたが、鎮種が本城へ移城した(永祿12年)後は本城ではなくなった。

これ対して、山腰氏は「正和」以来天草氏が河内浦に在城したというのが「河内浦城」で、鎮種の本渡移城後は本城ではなくなった。下田城はその直前、キリシタン内戦のとき、寺院と結んで、領主に反抗した領主の弟たちが立て籠もった城である。以上の様なことは河内浦に在城していた天草氏が、永祿から天正までの二代を天草鎮種(ミゲル)・種元(ジョアン)として、永祿12年の河内浦キリシタン内乱後、鎮種が本渡へ移住したという説に基づくものである。これは大正期より天草郷土史界の青木秀穂氏・元田重雄氏・松田唯雄氏以来の通説であった。

これに対して『グスマン伝導史』が昭和二十年に訳刊された後はその中に比定された天草氏

がミゲルを高種、ジョアンを久種とする見解が出された。

その後、昭和三十八年に鶴田倉造氏が「天草キリシタン史の問題」(『キリシタン文化研究報』第七年第二号掲載、『天草史談』十九号補足掲載)によって、天草氏のミゲルが鎮尚、ジョアンが久種である。さらに、この二代は永禄十二年に本渡城へ移城したのではなく、それは一時後退でまた河内浦城へ復帰したのである。なお、本渡城主であった種元はアンドレアである。以上の鶴田倉造氏の新説は天草氏の歴史研究上画期的な発表であったが、天草郷土史界ではまだまだ旧説の見解から脱しきれない人が居る。

### 三. 天草の古城群と河内浦城・下田城の城名

天草島における古城と河内浦城の存在を古絵図(古地図)及び古記録の中にどのように存在しているかを見てみよう。それは八種の史料がある。

第一種は、「慶安細川肥後国古城」(熊本県立図書館所蔵、江戸前期記)というもので、これには十五の古城名とその形体を、山城が十二、平城が三、そしてそれらの曲輪(郭)の間敷を記してある。

第二種は、「正保細川天草古絵図」(熊本大学附属図書館所蔵、江戸前期記)というもので、これは十五の古城名のみで、その城名は第一種と同じである。

第三種は、「細川天草明細絵図」(熊本大学附属図書館所蔵、江戸前期記)というもので、これは第二種と同様、十五の古城が記されている。但し、その所在地が前記「城木場城」に対して、それが北隣の「上野原」の所になっている。また佐伊津城が前記二ヶ所あるのは、山手の方が「高城」、海手の方が「金浜城」で、その後者の方が金浜の北隣の小串の所に記入されているが、これは金浜との誤記であろう。

第四種(熊本大学附属図書館所蔵、江戸初期記)と第五種(熊本大学附属図書館所蔵、江戸初期記)は、前者が四ヶ所、後者が五ヶ所で、その城名は同一であるが、一つだけ後者の肝腎な河内浦城が前者に欠けている。このことは欠落と見られる。これらの城跡を記載するのに向種とも二層または三層にした城の櫓の絵図を描いているのは他に無く興味深いものである。

第六種は、「肥後古城考」(『肥後文獻叢書』所収、江戸中期記)というもので、十二の古城名がある。これには下内野・城木場・佐伊津・大浦の城名が欠けている。大矢野の中村城を記載しながらも、大矢野古城は楠甫(現有明町)とあるのは特記事項で注目すべき点である。

第七種は、「天草風土考」(上田宣珍著『天草島鏡』文政年間記)というもので、これには六の城名、すなわち天草五人衆のみの城で、それを解題している。

第八種は、「天草案内」(元田重雄著、みくに社、大正十五年刊)というもので、これには天草五人衆の城は解説付きで、そのほか城名のみが八城あり、合わせて十五の城名がある。

以上八種の記録からみると、河内浦に存在した城についての名称が二つ存在している。一は



「河内浦城」の名称が二、「下田城」の名称が五である。この二つの城名は同一かそうで無いかということがまず問題になる。

そこで、「河内浦城」とある「天草風土考」の解題をみると次の様にある。

天草伊豆守鎮種

天草郷河内浦城に住す後下田と云

下田古城 天草伊豆守鎮種

天正十六年歿落庵城と成、下田は今宅町田村之内也。天正のころまでは河内浦といひし也。

上記のことは、「天草郷」は天正以前「河内浦」であったのが、それ以後は「壱町田」となり、その内の南部が「下田」である。この地の城は当時(天正以前)は「河内浦城」という名称であったが、それ以後は下田の地に古い城が存在しているというので、「下田古城」と呼称されている。

前記のことから既に判るであろうが、この二つの名称はどういう意味があるのであろうか。

「河内浦城」という場合は、天草氏の当時の旧時代的(江戸時代以前)な地名に基づく城名で、河内浦時代に存在した城という意である。これに対して「下田城」という場合は、天草氏の過去の城跡を新時代的(江戸時代以後)な地名に基づく城名で、「下田古城」とあるように下田に存在した古城という意である。

天草氏の河内浦の居城の名称は複雑である。「河内浦城」と「下田城」の二の名称があることについては、前述の様に「河内浦城」という一つの城の歴史的呼称の相違名である。ところが、現実には二つの城跡があり、それを通称では「河内浦城」と「下田城」といっているのである。

その「河内浦城」は現崇園寺の丘地で、その「下田城」は天満宮の山地である。この二つの城名は地理的呼称の相違名である。しかし、この地理的呼称の「河内浦城」と「下田城」は前述の歴史的呼称との関係から、それが通称的呼称になっているが、正確な名称であらうか。そうではない。

そこで、この地理的名称の違いを方角でいうと、崇園寺の方が北西にあたり、天満宮の方が南東にあたるので、これは前者が「河内浦北城」で、後者が「河内浦南城」ということでもきよう。しかし、これも最適な名称ではないようであるが、こう呼ばざるを得ない。

城が同領主の下に複数で存在している場合は、本城(居城)が一つで、他は支城(枝城・出城・端城等)とよばれるものである。旧河内浦、現河内浦の中心地に「河内浦城」と「下田城」が存在していることは、どちらかが本城で、どちらかが支城であるはずである。このことを意識しながら次の節へ進もう。

#### 四、古地図・古記録から見た二つの城郭

先に「河内浦城」と「下田城」についての名称は、前者が中世的名称で、後者が近世的名称であ

り、この二つの城名は同一の城であると述べた。それはこの地には通称「河内浦城」という崇園寺の丘地と「下田城」という天満宮の山地とがある。この城の間を一町田川が流れている。前者はその右岸にあり、後者はその左岸にある。ところが、古絵図・古記録ではこの二つの内、どちらか一つを城として記録してあるのである。このことをさらに確かめて見よう。

まず、古記録として一番確かなのは「慶安細川肥後国古城」で、これには「下田古城、山城、曲輪二百七十間」とある。この「山城」ということでは、崇園寺後背の山は40mで、天満宮の山は45mであるので、どちらも高さからの形態としては「山城」となる。「曲輪二百七十間」という縄張りは全周約540mである。この縄張りの長さも両方の城跡はあまり変わらないので区別できない。ところが関係する古絵図の中で、「細川天草明細絵図」だけには、河内浦城の古城の所在記入が、一町田川の左岸の天満宮の山の所に当る。これに対して、他の諸絵図は肝腎な川との関係が不明瞭である。従って、右のことからすると河内浦城の所在地は天満宮の所ということになる。

しかし、その所在は前述の古絵図が江戸時代前期のものであるから、河内浦城の最後の時期がそうであった。ということは、河内浦築城の最初からだとは決められないのである。それではいつ頃かからということになるが、それをはっきりと物語ってくれる記録は無い。

上記の事に関連して、アルメイダ及び、フロイスの記録を見ると「殿は邸に近いある寺院」という一文がある。このことからするとその「邸」は天草氏の居城である河内浦城、その「寺」は天草氏の菩提寺であったという現在の信福寺がそうであろう。この寺と天満宮所在の城跡地とは、山麓の道路線300mの地間に存在している。ところが、崇園寺所在の城跡は、信福寺とは距離は同じく300mであるが、この間に一町田川を挟んでいる事から、地形上大差がある。

従って、河内浦にアルメイダが伝導にきた天草鎮尚の1569年から天草久種が関ヶ原合戦に小西行長家臣として参加して焼らぬことになった1600年を廃城として見る。そして、元和元年(1615)、一國一城令が出されて破却されるまでの城は、現天満宮の所が天草氏の居城として見られ、現崇園寺の所は支城として見られるのである。このことが正確であるかどうかは不詳であるが、「細川天草明細絵図」だけはそのように見られるのである。

## 五、古字名と旧集落から見た二つの城郭

天草氏の居城が河内浦に存在したので、その城は河内浦城であるが、その城の所在地は河内浦のどこであるか。このことは古地図と古記録からみると、通称「河内浦城」と呼ばれている現崇園寺台地より、「下田城」と呼ばれている現天満宮の山地であると推定されるということをも前節では述べた。このことを古字名と旧村落の地形から見てみよう。

古字名からみると、崇園寺台地の所は「湯立免」という字名で、これに對比して、天満宮山地の所は「城山(じょんやま)」という字名である。このような字名からすると、「湯立免」と城郭と

の関係は不明である。ところが、「城山」は明らかに城が存在した山であることを読んで字のごとく物語っているもので、このような例は天草でも至る所に同例がある。こうして見ると字名からは天満宮山地の方が天草氏居城の河内浦城であったという事を物語ってくれるようである。しかし、崇圓寺の方は「寺領御証文之写」(『天草烏鏡』)に「古城長百五十間支配」とあり、また「天草山」という山号がある。このことは崇圓寺の方に城があり、天草氏の居があった事を強く留めているものと考えられるようである。

集落から見ると、城の存在はどのようになるであろうか。河内浦の地形は河内浦湾(羊角湾)の最奥に北方から南方へ注ぐ川(一町田川)とそれを挟むかのように東山と西山の連山がある。その間の南北に長い狭間(平野)が河内浦の中心部である。この南部の河口を少し登った現崇圓寺下が港であったらしい。この地の地名は「河内浦」の他に天草氏の名と同じく「天草」とも呼ばれていた。このことは中国・明の文献に「阿麻国撤」とあり、フロイスの記録に「アマクサノマチ」と出てくる。

この小平野の中を通る往還が2本ある。1本は東山連山の下を南北に本渡・久玉往還が通り、西山連山の下を南北に志岐・崎津往還が通っている。その中における集落は当時は点在するかのようにな少ない状態である。それを現集落名でいうと、西側の志岐・崎津往還通りの下から上へ、元下田・中村・平畑・平野・葛河内があり、東側の本渡・久玉往還通りの下から上へ、馬場・清瀬・志戸・唐干田がある。両往還の間に中村と倉田がある。

河内浦城の天草氏居城は、馬場の集落の上の字「城山」の現天満宮の山地を中心に所在したのか、それとも吉原の集落の上の字「湯立免」の現崇圓寺丘地であったのかどちらかである。天草氏の菩提寺は、字「城山」の居城から北へ300mの字「清瀬」の所の現在所在している信福寺(この上段平場)がそうであったものと見られる。

天草氏の河内浦城の領土の居城は、現天満宮山地の場合は、そこから河内浦の村落全体が展望できる。また、現崇圓寺丘地の場合は、そこから河内浦の村落全体が展望できる。なお、この城下は川が流れており、河口は港として交通・貿易の要所であった。

#### 六、天草氏の反キリシタン内戦と河内浦城

河内浦における天草氏の居城について知る記録上の方法の重要な一つは、当時のイルマンであるアルメイダの書簡(『イエズス会年報』所収)をはじめ『フロイス日本史』中のアルメイダの天草での活動記事である。このことはアルメイダを通して、永禄十二年にキリスト教を初めて河内浦に導入したとき、これに反対する天草氏の弟(二名)と僧侶達による内乱(内戦)があったときの記録である。

それは単なるお家騒動ではなく、キリスト教布教をめぐる対立が内乱となり内戦にまでなってしまった。この記事の中から河内浦城についてはまとまった記録はないが、それを考察

して見ることは重要な事である。

「天草の諸領域は、長さが十四里、幅は所によっては五、四里、または二里である。領内に三十五の村落と四つ城があり、かの殿の主な居宅は河内浦という地にあり、殿には四人の息子と二人の(兄)弟がいた」

天草氏の領土は下島の北部が志岐氏の領土であるので、それを除いた中南部である。その志岐氏と天草氏の境界は、両氏の勢力の強弱によって変化があるが、本来は、東は本渡の広瀬川に沿って西へ向い、本村と山口の峠から鶴野々の峠を経て、福連木村の南山から下津深江村と小田床村の間の峠と見られている。

「三十五の村落」があるのは、この天草氏の領地には「高岩万石にて四十ヶ村と云、今三十ヶ村余り」(「天草風土記」)とあり、これは天草の乱以前が五十ヶ村、以後が三十三ヶ村とあるのからしてうなずける(細川家文書「天草史談」一九号)。

この領域における戦国期の中世城を大小ともに合わせると十二ヶ城も数えられる(「天草建設文化史」)が、本格的な城は四ヶ城プラス一城の五ヶ城と見られる。というのは、フロイスがいうその四ヶ城を、松田氏は初め河内浦城、下田城、久玉城、本渡城であると上げているが、後で、「二人の弟は、直ちに四つの城、及びその他総ての地を占領した」とある。しかし、この弟は領主が河内浦城から後退して本渡城を一時居城としたとあるが、その本渡までは奪取していないのが、事実であるのでそれは矛盾する。

そこで、天草領下の主な「四ヶ城」というのは、河内浦城(含下田城)・久玉城・小宮地城・本渡城だと推定して「二人の弟は、直ちに」本渡城を除く、三つの城(河内浦城と下田城を別々にみると五ヶ城)を占領したものと考えられる。なお、小宮地城は天草氏の統一で宮地氏の居城であった(この時期の宮地氏の存在は不詳であるが、それに代わる城代が居たであろう)。

問題は河内浦城であるが、フロイスの文中では河内浦に天草氏の城が二つ存在している名称表現はない。しかし、領主ミゲル(鎮尚)と対決した第二名(大和守と刑部大輔)との対戦状況を見ることによって、城のことについて何かが掴めないであろうか。

河内浦にはアルメイダの布教に道を開いた領主天草鎮尚の居城があり、彼はキリスト教に入信し、積極的に活動したために、その反動として仏教勢力との対決になったが、それは「彼らの純然たる利己利害関係」が内に含まれていたために大きくなって、内戦にまでなったのである。

初めは領主の弟等仏教勢力が優勢で、レアン(代官とあるが城代家老?)が口之津へ追放され、次にアルメイダ(イルマン)がそれに続いた。そして、城主鎮尚は「殿は、その数日後には居宅のあった土地及びその他の領地を放棄して、妻子及び、ごく少数の人数とともに本渡城へ逃避することを余儀なくされた」そして「天草殿は五・六ヶ月間、大いに困窮しながら本渡の城に引き籠もっていた」。この間、弟等は久玉城を本拠にして「河内浦城に突入し、たちまち一切を掌

握ってしまった」。しかし、鎮尚は河内浦城を六ヶ月後に奪回したのである。この後、弟等は劣勢となった。そして「また兩人(弟等)は一城に退去した」。これが久玉城である。この城に「三・四ヶ年留まっていた」。

以上のような内乱があったことをアルメイダ及びフロイスの記録は物語ってくれる。この記録からは、河内浦城そのものについては不詳である。河内浦城と下田城という二つの城としては登場していない。

強いて考察(推定)すれば、平時は河内浦には領主鎮尚の居城と城代レ안의居館が存在していた。弟等の居城は久玉城であつたらう。このとき両者が対決したときはレアン勢力が六百人、仏教勢力が七百人であった。この二者の対決は、弟等仏教勢力の方が優勢で、レアン等キリシタン勢力を追放して、そこへ久玉城から侵襲してきた。そして今後は領主の居城と対決して、鎮尚をも追放してその居城を奪取したのである。上記の様に見て来ると、河内浦に鎮尚の居城とレ안의居館としての二つの配置が考えられる。それが、現在の崇園寺の丘地と天満宮の山と見られる。この二つの城郭に領主鎮尚と城代レ안의どちらが存在したということになるのであろう。

#### 七. 天草コレジヨの存在と河内浦城との関係

河内浦城は天草氏の居城である。天草氏の最後のキリシタン城主天草久種がコレジヨの導入者である。コレジヨは当時日本唯一の最高学府である。従って、コレジヨと天草氏と河内浦城の三つの歴史的な存在意義は極めて大である。

ところが、河内浦城の存在が現河浦町の下田に二ヶ所あるが、その所在地の明細と二つの関係は不明である。と同じにコレジヨの所在地についても全く不明である。そこで、河内浦城とコレジヨとの関係があるのかどうかを可能な限り究明して見る必要があると考える。まず、コレジヨの存在について唯一の記録史料である、ルイス・フロイスの通信報告書と彼の「フロイス日本史」(松田毅一監修・中央公論社版)がある。それに基づいて考察して見よう。

1591年の前半期に、それまでのコレジヨの存在地は島原半島西南端の加津佐であった。この地から天草島の河内浦へ移築するのであるが、その理由としては、関白秀吉が「大勢のイエズス会関係者をこうした領内に匿しておくことは、関白が少しでも捜索すれば判ることであり、決して隠しきれぬ事では無く、また非常に危険な事に思われた」ので、「学院と修練院を撤去して、それらを天草に移させる様にと強く要請するところであった」そして「学院を天草に移転させることを了承した」のである。「このことは迫害時にはまさに打って付けの隠遁地であったので、学院を移す場所として選ばれた」のである。

このように、秀吉のイエズス会およびその施設への圧迫・迫害の危険が予想される中で、島原の加津佐の地でさえ危なくて、もっと奥まった天草の河内浦の地が選ばれた。このとき、初

めはキリシタン大名「有馬晴信が断固として、そのことに同意しなかった」が、学院(コレジヨ)・修練院(ノビシヤード)・神学校(セミナリヨ)の内「神学校は自領に残すことを条件に」、同じくキリシタン大名大村純忠が「日本語を学習していた司祭たちも大村に残留する事を条件とした上」で、「学院を天草に移転させる事を了承した」(含修練院)のである。

上記の三つの建物の規模と人員についてみると次の様である。「学院、修練院、神学校という三つの大きい家屋には、それぞれにイエズス会員、同宿下摸を含めて百人を超えるほどの人員がおり」とある。それは「それぞれ」「百人を超える」と言うことであれば、学院に百人以上、修練院に百人以上、神学校に百人以上、計三百人以上の大人数であった事になる。

これらの移転の事についてみると「神学校は、有馬から一里奥に入った八尾尾と呼ばれる山中のある場所に移される」ことになった。この時の努力に関しては「毎日、二百、三百、ときには千人もの人が同時に働いた。ある者は山の樹木を伐採し、他の者はそれを運搬し、ある者は材木は削り、別の者は建物の地面を固めた。また、一方では幾つかの丘を掘削する者、他方ではその上を埋めて地均しをし、建築に堪えられる様にする者もあり、かくて一ヶ月と少しで皆が驚嘆するほどの仕事が完成した」。

上記は、島原での事であるが、実は「天草においても同様な工事が進められていた」とあり、天草の河内浦へ学院と修練院を移動するのに必要な建設工事が進められた事を意味する。すなわち「こうした工事に対して、ドン・ジョアン(天草久種)はドンプロタジョ(有馬晴信)に劣らぬ程の人員を差し出すことを必要としたが、彼はすべてを深い愛情を持って行い、自らもしばしば重だった家臣達とともに工事にたずさわった。かくて、神学校が八尾尾に移転した少し後に、学院と修練院も天草に移された」のである。

こうして出来上がった河内浦の学院と修練院の建築とその人員については次の様に知ることができる。

「そこでは、ドン・ジョアンが先に提供してくれた数軒の家屋と、我らイエズス会が以前から所有していた家屋をもって、60人近いイエズス会員と、20人以上の同宿、及び40人近い下摸を収容するに足りる一学院が成立された。これら下摸全員のためには数軒の家屋と仕事場が作られた」とある。

このような「学院の建物は、あれほどの人員をすべて収容していた広大なものであった」とある事から、それ相当の大きな建物群が存在していることが推測される。それは学院がイエズス会員60人、同宿20人、下摸40人で140人であるが、これに修練院の人員は別に「それぞれ百人を超える」とあることから、百人以上と考えると合わせて約250人は居たことになる。

このコレジヨがさらに歴史的意義を持つのは天正遣欧使節の四少年すなわち、伊東マンショ、千々石ミゲル、原マルチノ、中浦ジュリアンが天草の河内浦へ来て、イエズス会に人会い修練院及び学院において学んだ事である。

「四人とも自分達が成すべきことをさらによく考察するために、数日間黙想をした後、巡察師は彼らを天草に連れて行き、1591年7月25日、栄光の使徒サンディアゴの祝日に彼ら並びに我等総ての同僚たちの深い喜びの内にイエズス会に受け入れられた」そして「四人の貴公子、学院の司祭達や修道士たちと一緒に食事するように招待した。その食事の後、巡察師は四人の貴公子を修練院に連れて行き、その院長に引き渡した」

上記のことは、コレジヨが天草に移転したその年の七月のことであった。この翌年に文禄の役に突入する。そうして「関白が名護屋に下ったことから」「関白が天草にこのように大きい学院があることを知って、小西アゴスチノ津の守殿に対して大いに激昂し得ることや、また関白がキリシタンや司祭たちに対しても激しい怒りを示す事が案じられ、イエズス会としてはついに、学院を天草の地から撤去はしないが、三つの部分に分けることを決定した」それはさらに次のような事である。

「その地の奥まった所にある隠れた二ヶ所に、そしてその各々に学院の3分の1以上が収容され得る家屋が設立された。それらの家屋にはクラス分けに従って、時間を空費しないよう心がけながら、生徒たちは教師たちと一緒に送られた。後の一部は学院の建物の一つに残された」とある。

このような危機があったが「これらの島々が非常に遠く離れていて、名護屋へ良材を運送するには甚だ困難を伴うので」「彼らは天草の地へは来ないことになり」「三ヶ月と経たぬうちに我等の事情がすでに好転してきたので」「再び学院に合流した」ということで、この問題はこれで解消したのである。

以上見てきたように、右の記録はコレジヨの移転の事情と建物の概観についていくらか知ることができる。天草のコレジヨについての唯一の記録である。他には当時天草のコレジヨにおける教授と学生の名簿があるので、コレジヨの天草における地点及び地形や地理については記録が無く、それを知る史料がない。そこで、記録の方からは限界であるが、河内浦の中で、地理と地形を検討して、さらに考察を深めてみることにしたい。この場合、天草氏の居城としての河内浦城とどのような関連になるのかが明確にできれば幸いである。

フロイスの記録からは、天草氏が河内浦に設置したとは明記していないが、天草久種が居城地河内浦に設置したことは間違いない。

そこでまず、再確認したい事は、河内浦の地に「学院の建物は、あれほどの人員を収容していたほど広大なものであった」、なおその他に「現今では下(西九州)において最も大きく立派な建物となった美しい教会があった」とある。

このように、学院(と修練院)と教会があり、その建物が大きく、その土地が広がったのである。従って、この土地は現在の神社・寺院の境内に十分匹敵する。また、それらの境内の広さは、以前に学院や教会が存在した例が他の地に幾つもあるので、その敷地と関係があるのかど

うか見ておく必要がある。

当時の神社・寺院の存在は明確ではないが、当時がキリシタン全盛期であれば、その存在は影が薄い。しかし、現在の神社・寺院の場所を考察して見ることは必要である。

河内浦の城下には、八幡宮・天満宮・信福寺・安養寺・崇園寺が対照になる。

八幡宮は大正9年から現在地の丘の上に上がったが、元地は現中学校の校舎の中央部であった。天満宮は河内浦城の城山の本郭の所であるので、当時はここには存在しなかったと見られる。信福寺は、慶安元年(1648年)に再興された。旧敷地は現在地の高い所の平場であり、この寺は天草氏のキリシタン信仰以前の菩提寺であったと見られている。安養寺は元和三年(1617年)に創立したので、それ以前はどんな土地であったのだろうか不明な所である。崇園寺は元河内浦城の天草山の館地であった所に、正保二年(1645年)に創立したので、当時は寺は存在していない。この五つの土地の他に、さらに関連あると考えたい所は、一町田村大庄屋野田氏と下田村庄屋園田氏の屋敷である。

以上7ヶ所について、それらの土地が学院の成立条件にあうのかどうか確かめて見よう。信福寺の旧敷地は少々狭いところにあるので、そこに寺院が存在していたとすると、他の学院などの建物は成立しえない所である。八幡宮の旧敷地は、実は現在コレジヨ所在参考地になっているが、この地周辺は豪雨になると洪水になり、一面浸水状態になる所である。崇園寺の敷地は居城の館地であり、天満宮の敷地は城の主郭であるので、その城関係の建物が存在している所である。

野田屋敷(現一町田小学校地)と園田屋敷(現存)は共に広い敷地で、当時は役座は存在していないので他の使用地であつたらうが、野田屋敷の所は平野の中央で、一町田川の右岸の低地であり、また、園田屋敷の所は、一町田川の河口の港地に近い所で、共に外来者の日に丸見えする所である。以上のように見て来ると、上記の七ヶ所は、学院や教会の成立の場としては不適當であるので、その存在が考えられないのである。このようなコレジヨ建築の平場は、河内浦の地で他に捜しても見つからない。ところが、七ヶ所だけ考えられる所がある。それは天満宮裏地の広い平場が参考地として注目されるのである。何と言ってもこの広い平場は、学院などの建物敷地の広さには十二分であることはもちろん、それだけではなく、城下の平野から全く見えない奥まったいわゆる死角になっている所であると言うこと、他の箇所が平地で、何処からも良く日に付く所であるのと大いに相違する所である。従つて、当時のコレジヨの移転と建築の条件、すなわち危険から逃れて、できるだけ内密の隠所に建設する場所としては最も適した所である。このことに注目して、この地を初めてコレジヨの所在参考地としての意見をここに提出する事になるが、このことは重大な意味を持っていると考えられる。このように見て来ると、コレジヨの所在地と河内浦城(南城)との関係を見る事ができるであろう。しかし、このことはあくまでも推論であつて、断定するものでは決してない。今後の発掘調査研究を待たな



ればならないことは言うまでもないことである。

#### 八、河内浦北城(現崇園寺周辺)の縄張り確定

河内浦城が二つ存在している内の下田北西の大草山(現崇園寺周辺)の方の縄張り構造を紙上に復元して見ると次の様になるであろう。

まず城の中心地である本城(本郭・内郭)は崇園寺本堂の裏山にあたる丘がそうである。これは第二次の発掘調査によって証明された。この本郭の曲輪は、約1m差のある上段と下段に区別される。上段は高さ45m、長さ25m、幅10mである。下段は長さ39m、幅10~15mである。この曲輪は北側に堀切が成されており、その北東には堅堀がある。東側は急傾斜のままで、西側と南側は帯曲輪が形成されている。なお、この帯曲輪は第一次調査によって空堀が形成されていたことが解明された。

次は未発掘調査であるが、本郭の西側の稲荷社のある曲輪の平場は、本城に対しての外城(外郭)であろう。高さは本城より5m高い50mで、この頂よりの平場は長さ約30m、幅約10mである。

また、未発掘調査であるが、寺の庫裡の西側に存在している独立した丘がある。これは出城(出郭)に当るのである。この頂きの平場は高さ30m、長さ50m、幅12mである。

本城の居館地は、本郭と出郭の間の平場、すなわち現崇園寺の本堂と庫裡が存在している広場である。この敷地は、城の居館が廃止されていた後には郡代所が設置され、その後、崇園寺の境内と成った所である。このような例は、本渡城の居館地の後に本戸郡代所そして明徳寺となり、また、栖本城の居館地の後に栖本郡代所そして円性寺となっている例と全く共通する。さらに、久玉城の居館地は、郡代所は無いが無量寺の境内となっており、大矢野城の第二の城の居館地が遍照院の境内と見られているのも共通する。

ほかには、本城と外城を繋ぐ根本に当る小高い箇所を遠見山と見られる所がある。ここからは、前方(南)右手(西)が外城、左手(東)が本城、そしてさらに南東前方に河内浦城の城山が水平線に見える。この本城と前方の城との間が、河内浦の南北に狭いが、長い平野と集落が下方に見える。このように見晴らしのきく遠見山である。また、前方彼方に一町田川の河口から羊角湾の一部まで見ることができる。

この城の大手口と搦手口に当る所は何処であろうか。大手口は地形から考えて最も妥当と見られるのは、西側の外城と出城の間の谷間の所と見られる。なお、現在崇園寺の総門から山門へ登る石段の参道は、寺の創立時に造成されたものである。但し、この地の石段と石垣の造成は嘉永6年(1853)の建設である事が、参道西壁にある碑文を小生が、昭和41年に、長年覆っていたかづらを取り払って発見したとき初めて判明した(当時の住職はそれまで、不見不知であったという)。また崇園寺へ登る道が西南にあるのは、寺の石段を造る前の、すなわち郡代所

時代の旧道と見られるものである。搦手に当る所は、本城の北方で、遠見山の東側の城の首に当る所と見られる。

城の生命である水源は、大手門に入ってまもなくの所で、本郭の曲輪の西南下に当る所で、そこに現存している石積みの井戸と崇徳寺の庫裡の中の南側の所で、出城の東側に当る所に現存している石積みの井戸と、大手口から入って右手(北側)の谷間に小さな流れがあるが、その上流の奥が泉となっている所がある。以上三つが本城の城内での水源として見られるのである。

#### 九. 河内浦南城(現天満宮周辺)の縄張り推定

河内浦城跡が二つ存在している内の下田南東の城山(現天満宮周辺)方は全く未発掘調査であるが、その縄張り構造を紙上に復元してみると次の様になるであろう。

まず、城の中心である本城(本郭・内郭)は天満宮境内に当る丘がそうである。これはまだ、発掘調査が成されていないので、明細は不明である。本郭の曲輪の平地は高さ45m、長さ36m、幅21mである。この曲輪の裏手の堀切は現在明確が無いが、一段(約5m)低い平地に続く。本郭の両脇は谷間で、その南側が外城で、北側が出城に続く。

外城の曲輪の平地は高さ40m、長さ59m、幅21mである。出城の曲輪の平地は高さ40m、長さ24m、幅16mである。

この城は出城・本城・外城の裏手の、さらに高い山との間に三段(三面)平地が南北に長く続く。上段は出城と本城の裏手で高さ40m、長さ約50m、幅約30mで、中段は外城とその北側の谷間の裏手で高さ38m、長さ約50m、幅約50mで、下段は小平地でさらに二段に分かれている。

本城の居館地は、本郭の平地すなわち天満宮が存在している広場である。城の居館が廃止された後に天満宮の境内となったのであろう。このように城の後に宮が存在している例は、本渡城、志岐城、上津浦城など幾つか例がある。他には、本城の裏手のさらに平地の裏手の上は遠見丘(約50m)と見られる所がある。ここから遠見すると北西前方に河内浦城大草山の全体が良く見える。その館と出城が下方に、本城がやや下方に、外城が水平に、遠見山がやや上方に見える。本城と前方の城との間に南北に狭いが長い平野と集落が下方に見られる。また、この城の丘の裏手(東北)の高い山の頂上(200m)はさらに遠見山といわれて、ここからの遠見は河内浦の外周までも見える360度全体が展望できる名実共に遠見山である。

本城と大手口と搦手口に当る所はどこであろうか。本城の下の登口とみる向きもあるが、これは天満宮が成立してからの参道口であろう。大手口は外城に向かって右(南側)の登口と見られる。これを登ると裏手の三段平地の下段平地へ、そして中段平地と外城へ、そして上段平地と本城へと連続している。これに対して、搦手は出城から下がった所で、大手口からは一番北側に離れた所に当る所である。

城の生命である水源は、中段平地の奥に泉水がある。この他、大手口と搦手口の各々その上

方から谷川水が流れている。これは旱魃でも絶えない万年水であると言われている。以上三つが本城の城内での水源として見られるのである。

本城には石垣遺構が至る所に残存している。まず、本郭の周囲側壁、二の郭の北面側壁、裏手平場の二段目南側壁、同三段目西側壁とその下段の登城側壁等々である。これらの石垣に城時代以後の農地側壁とみる見方もあるが、これら石垣の築造年代については十分な調査研究を必要とするし、それを待たなければならない。

なお、本城と出城の谷間に、小型ではあるが宝篋印塔と五輪塔が数基残存している。これは天草氏関係の唯一の墓碑遺物史料である。

#### おわりに

河内浦城は北城(崇園寺境内)と南城(天満宮境内)とがある。本稿はその南北の二つの城跡についての位置と縄張と構造を史的観点から見てきたが、その二つの本城と支城との関係を決定的に解明するだけの歴史的記録史料がなく、限界があるので、本稿では結論的な見解を出すことができない。従って考古学的発掘調査を必要とする。今、それが北城の主郭について第一・第二調査を終えた所である。これからさらに北城の主郭をとりまく外郭の発掘調査、そして、南城の主郭と外郭と残存している多様な石垣などについての本格的な調査が必要である。

これらの調査の進行と同時に、町としては河内浦城跡の公園化計画が必要であり、その総合調査終了後はその城跡公園の完成が期待される。

この河内浦城跡の公園化は先に完成した天草コレジヨ館の博物館と姉妹をなすものである。そのコレジヨに象徴される南蛮文化を導人し発展させた天草氏を主体とした歴史は河内浦町を中心に天草島全体に及びさらに国際的な広がりを持っている。河内浦城跡はそのような歴史的ポイントである。

本小稿が以上の様なことを考える一助になれば幸いである。

### 〔付論3〕 民俗例に見る掘立柱建物の実例

松 舟 博 満

先日、岐阜郡山江村万江柳野地区で掘立柱建物が新たに建てられている所に遭遇した（立道寅男氏の掘立小屋）。建物は桁行387cm、梁行302cmを測るものであった。

梁行で間柱の無い方が入り口にあたり、柱内寸法は302cmを測る。北向きである。

東側桁行は道路に面し、3本柱でその間隔は、入り口より間柱までの間隔が181cm、間柱から隣柱までの間隔が193cmである。

後側梁行は3本柱で、道路に面した角柱より間柱までが141cm、間柱から西側角柱までが143cmとなる。

西側桁行は3本柱である。隣柱より間柱までが176cm、間柱から入り口の隣柱までが206cmを測った。

梁行の入り口寸法は302cm、梁行の後側寸法は141cm+143cm+間柱の太さ14cmを足した298cmで、誤差は4cmとなる。

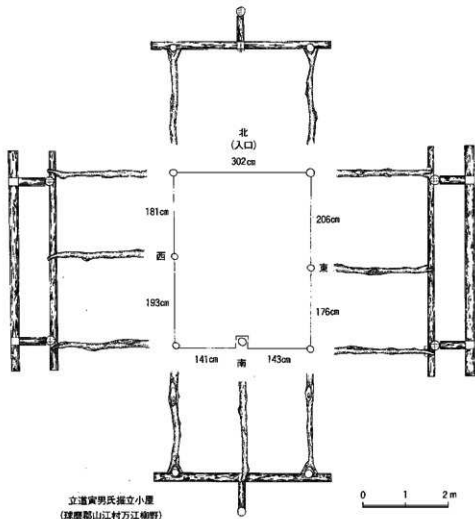
桁行の東側寸法は181cm+193cm+間柱の太さ13cmを足した387cmに対して、桁行の西側寸法は176cm+206cm+間柱の太さ14cmを足した396cmで、誤差は9cmである。このように梁行で4cm、桁行で9cmの誤差が生じるが、図上に線引きすると僅か9cmの差で、建物として完成するのである。

ここでは、柱として「栗の木」がそのまま用いられている。この木は腐れても心材は強く、一般に掘立柱建物の柱として古くから用いられていたと言う。又枝がほぼ同じ大きさになる事からも柱として古くから対応年数のある材木として注目されたのであろう。

1. 柱 (P.58 - 図②③) 桁までの高さはほぼ220cmを測るが、土中に埋もれた部分を入れるとその長さは3m近くになると思われる。柱の上部に桁をのせる又枝を付けているが、その他の枝は短く切り詰めて、柱を造りだしてある。柱はすべて曲がっている。直なものはない。
2. 桁 (P.58 - 図④) ここでは、杉の丸太が外皮の着いたままで使用されている。
3. 梁 (P.58 - 図⑤) 入り口の梁は皮をむいた杉丸太が使用され、中央は臍穴が突き通して開けられている。ここに棟を支える臍柱を差し込み、梁は間口の幅で両側に桁の太さの欠き込みを半分ほど入れることになる。
4. 臍柱 (P.59 - 図⑥) 屋根の勾配を決める。梁から棟の長さが臍柱になる(ここでは60cm)。その両端に違いの臍を造る。
5. 棟 (P.59 - 図⑦) 梁と梁の間隔で臍穴を開ける。

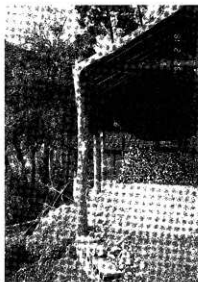
建て方の順位

1. 片方の桁行柱の又枝を桁方向に開いた状態で建て込み、又枝部に桁を乗せ込む。この時点で桁の浮きは「当て木」と「すけ木」を用いて柱と桁のガタツキをなくす。(P.59 一図⑧⑨)
2. 同じように残りの桁行を建て込む。
3. 入り口側の隅柱より内側の桁に欠ぎ込んだ梁を乗せる。
4. 後側の間柱を建て込み、同じように隅柱より内側の桁に梁の欠ぎ込みを乗せる。
5. 桁と梁が交差する四隅に「筋かい」を打つ。(P.59 一図⑩)
6. それぞれの梁の中央に開けた臍穴に臍柱を差し込み、下からクサビを打ち込んで臍柱が動かないようにする。
7. 臍柱の臍に棟を差し込み、棟が動かないようにする。





① 獨立柱建物



② 柱 (西側)



③ 柱 (東側)



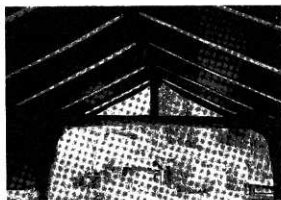
④ 桁 (東側)



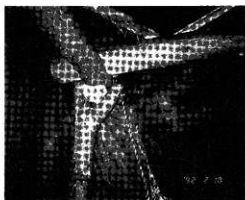
⑤ 梁 (正面)



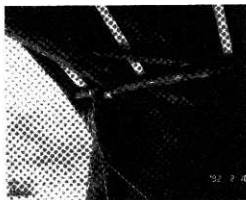
⑥ 隅柱



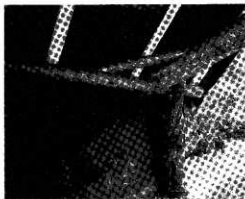
⑦ 棟



⑧ すけ木



⑨ 当て木



⑩ 筋かい

# 写 真 图 版

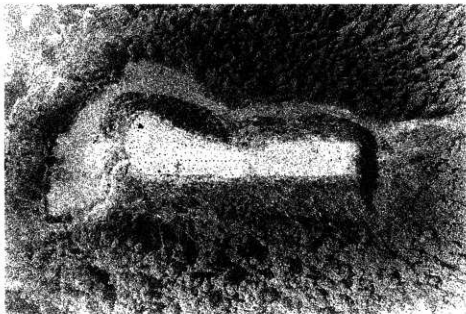




図版1 河内浦城跡遠景（北側より）



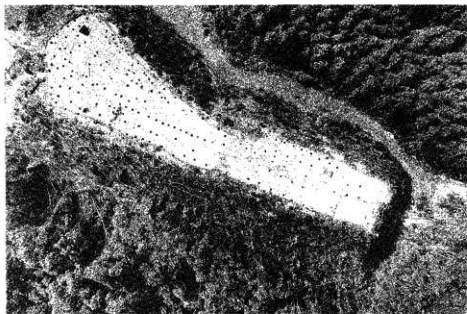
図版2 河内浦城跡遠景（東側より）



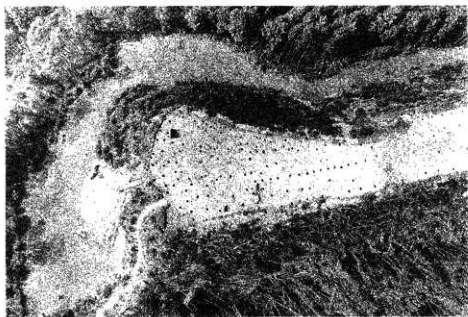
图版 3 遗構全体写真(1)



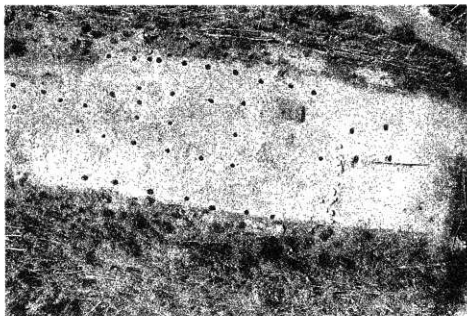
图版 4 遺構全体写真(2)



図版5 遺構全体写真(3)

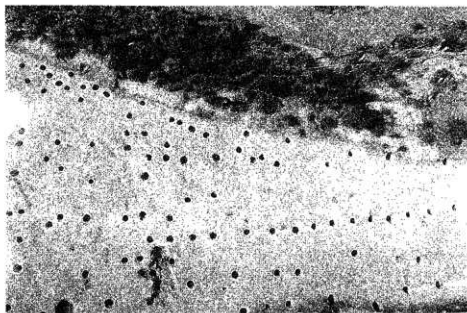


図版6 I郭一②・南西側帯曲輪・南側帯曲輪

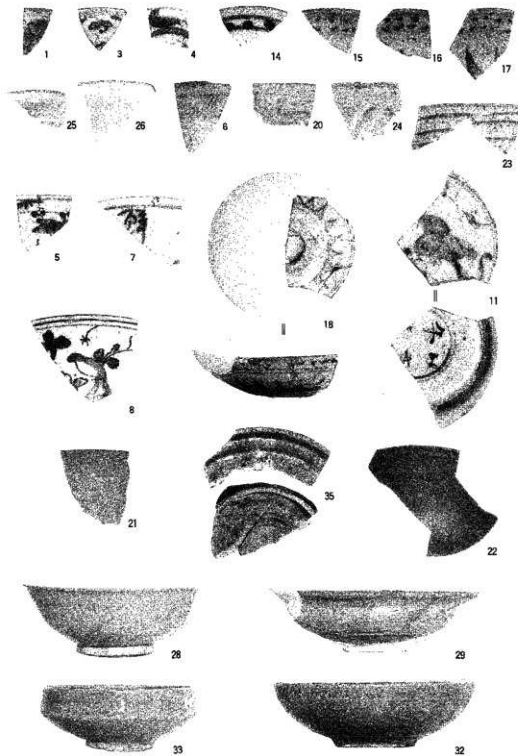


圖版7 I郭一①

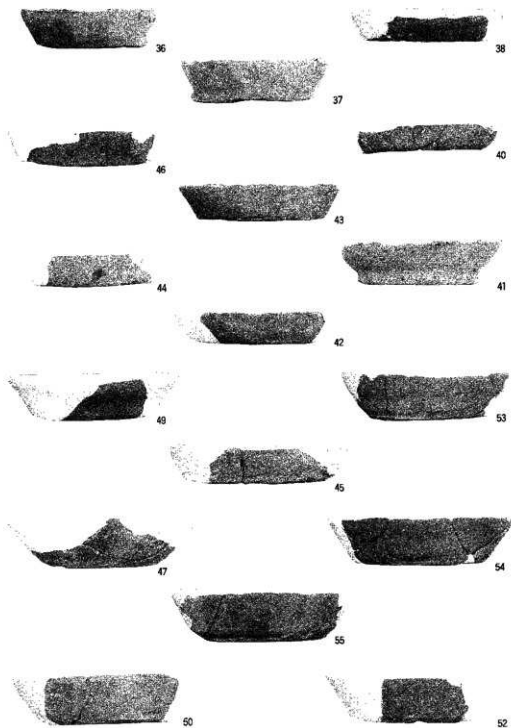
(SB01・SB02・東側柵列・西側柵列・集石狀遺構・敷石狀遺構)



圖版8 I郭一② (SB03・SB04・SB05)



図版 9 出土遺物(1)



図版10 出土遺物(2)

河浦町文化財調査報告第2集

## 河内浦城跡Ⅱ

平成4年3月31日

編集発行：河浦町教育委員会

〒863-12 天草郡河浦町河浦5223

TEL (09697) 6-1111(代)

印刷：株式会社 大和印刷所

〒862 熊本市戸島町920-11

TEL (096) 380-0303